**№2　テーマ『愛の実力』**

**講話日2005年2月14日**

**司会：それでは、本日は「愛の実力」というテーマをもちまして、先生のほうにご講演いただきます。それでは、芳村先生、よろしくお願いします。**

**芳村：はい。皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：だいぶ寒くなってまいりましたけど、また風邪もはやってますので、どうぞ健康に注意して頑張ってください。今日は、今年第１回目の月曜セミナーですけど、今日のテーマは「愛の実力」。これは感性論哲学のですね、人生を語る基本原理が、感性論哲学の人生を語る基本原理がですね、この人生は意志と愛のドラマである。そういうこの考え方で人生を考えていくわけですけども、とにかく基本的にいって、人間というのは、この自分が意志するもののために生きて、自分が意志するもののために死ぬ。また人間は、自分が愛するもののために生きて、自分が愛するもののために死ぬと。これはこの人生の基本であります。それが故に、この素晴らしい人生を生きていこうと思ったならば、心から愛することができるものと、人生を懸けて意志するものを持たなければならない。心から愛するものもなく、また人生を懸けて意志するものなくて、何が人生か。そういうですね、この人生の生き方の基本というものをちゃんと押さえなければなりません。**

**昨年度は、この後半ずっと意志の問題でお話をしてきましたけども、今日から約３回、４回ですね、この愛の問題で今年は大半を、お話をすることになると思います。意志というのは、これはこの自己中心的な心の働きであって、愛というのは、他者中心的な心の働きである。ですから、人生というのは、この自己中心性と他者中心性のバランスというものがですね、非常にこの重要な課題である。また仕事をする上でも、社会において生きていくためにもですね、この自己中心性と他者中心性のバランス、これが社会であり、また、この仕事においてもそれが非常に大事な、この仕事感覚になってくるわけですね。この自己実現の人生を歩む。これは前年度、お話をしたことですけども、今日、お話しするのは、この人間関係の問題ですね。この他者中心的な心の働きという、社会を生きるために基本的な、大事な原理ですけども、仕事をする上でも、また、会社内での人間関係においてもですね、とにかくこの愛の能力というものが非常に重要なこの課題になってきます。**

**社会に出れば、この人脈というふうに言われるようにですね、素晴らしい人間関係をつくる力、これがこの会社の中でどれほどその人が力を発揮できるか。また社会の中でどれほどその人が仕事を伸ばせるか。それを決定するわけであります。いかなる素晴らしい能力も、素晴らしい人間関係をつくる力なしには生かされない。そういうことで、この能力はあってもですね、人間関係につまずいて人生を無駄にする、駄目にする人もたくさんおります。で、能力も大事ですけども、その能力を生かすために、社会においては愛の力というものがですね、基本的に非常に大事なベースになってくる。そういうところから今日はですね、愛のこの力をつくっていくための、その土台になる基本的な話をまずはさせてもらいたいと思っております。**

**レジュメの第１番目に書いてありますように、人間は愛なしには生きられない。これはもう、おぎゃあと生まれた瞬間からですね、親の愛なしには、人間は育つことはありません。そこから始まってですね、その親子の愛、男女の愛、夫婦の愛、それから、師弟の愛ですね。先生と弟子という師弟の愛。教育も愛の実践といわれるし、職業も愛の実践、仕事も愛の実践。その仕事をする上でも、その仕事の心の中にですね、この愛の精神がなかったならば、その仕事に魂が入らない。心ない仕事の仕方になってしまう。そういう意味で、社内においていろんなこの役職を担って仕事をする上でも、その基本にやはり愛の精神というものを置かなければですね、その仕事に魂は入らない。その仕事に心が入らない。ただ事務的で、義務的なその情熱のない、こういうようなその仕事の仕方になってしまう。とにかくこの職業においてもですね、愛というのは、これは基本的に職業愛の実践といわれる、そういうこのことを考えればですね、この具体的に仕事をしていく場合に、愛の力を成長させていくことがいかに現実的に大事な目標であるかということはわかってくると思います。**

**ところが、その今、われわれが置かれておるですね、この愛の現状というのはいったいどういうものなのか。これは皆さん方もご承知のようにですね、今の社会というのは、離婚の激増、幼児の虐待、そして、この違いを理由に対立をし、けんかをし、殺し合う。そういうこの状況が全世界的に行われておる。言ってみれば、この人間関係が至るところで寸断されておってですね、その愛の力というものが非常にこう脆弱化してる、弱くなってる。そういうふうにこの言っていいような状況ではないかと思います。だけども、片一方ではですね、この『冬のソナタ』が大ヒットするというふうな、そういうこの、冬ソナブームみたいなものがあってですね、愛を激しく求める、そういう気持ちは非常に強くなってるわけですね。で、これはいったいどういうことなのか。で、この夫婦が別れて、親が子どもを殺して、高齢者の虐待というものも非常に今、たくさん世界にあるわけですけども、この子どもが親を殺す。そして、違いを理由に人間同士が闘う。そういうことをしておったならば、やがては、人類はですね、そのことによって絶滅するというふうな、そういうこのことすらですね、考えざるを得ないような、そういう原理的、この危機に今、人類はあるというふうに、言わなければならない。**

**で、なぜ、いったいこの急に離婚の激増という問題が起こってきたのか。また、なぜ、幼児虐待という問題もですね、最近になって叫ばれるようになったのか。また、養護老人ホームなんかでも、ひどい老人への虐待が行われておるということがですね、NHKのドキュメンタリーで報道されるというようなところまでやってきておる。また家庭においてもですね、その高齢者の虐待というのが、非常にこう進んでおって、人知れず、そういうふうなですね、この悲しい出来事があちこちで起こっておるということは、皆さん方もご承知だと思います。また、この幼児の虐待というものもですね、これは親が自分の子どもになんか言うことを聞かそうとする。だけども、子どもが親の言うことを聞かない。そういうところから親がむかついてですね、なんとかしつけのつもりでこの教育しようと思って、それが虐待というふうに言われるような、そういうひどい行為になってしまう。そして、至るところで、この宗教の違いや、民族の違いや、イデオロギーの違い、そういうものを理由にしてですね、戦争が行われる。**

**で、なぜそういうこの現象が出てきたのか。この背景にはですね、この近代という時代がずっと理性の時代で、あらゆるものを合理化するという、そういうふうなことが行われてきた。で、自然も合理化され、社会も合理化され、人間もこの理性教育一辺倒でですね、合理化されてきた。その結果としてですね、この理性というのは、真理は１つと考える。また矛盾を排除する能力である。そして、理性はみんなに共通するものをつくるというですね、そういう画一化の能力であります。であるが故に、人間がこの理性化され、合理化されてしまうとですね、そうすると、この真理は１つという、そういうこの原則にのっとって、違う考え方を持った人間と対立をする。自分と違う考え方を許せない、憎いというですね、そういうこの相手を否定するような、そういう心情が生まれてきてしまう。そして、理性は矛盾を排除する。矛盾というのは、自分と異なるものを排除していく。そういうところから、この自分と同じ考え方でない人に対して嫌悪感を持ったりですね、そういう人を敵に回したり、あるいは、イエスマンばっかり集めて仕事をして、自分の言うことを聞かない者は全部退けてしまう。左遷させてしまう。遠ざけてしまう。そういうふうな状況が生まれてくる。そして、理性は画一性を追求する。みんなが同じでないといかんというですね、そういうこの気持ちになって、みんなをこの画一的に統一していこう。そういうことをすることによって、そういうこの統一に従わないね、そういう人たちに対して、この虐待を行う。あるいは、排除する。そういう状況になってしまう。**

**で、そういうところからですね、この人間関係が崩れていくという状況が出てくるわけですけども、だけども、急にここのところ、何十年かですね、そういう現象が急に出てきたのは、これは社会構造という、社会全体がですね、縦型社会から横型社会へと社会構造が進んでいって、で、これまでは画一的な社会が当然だったんだけど、どうも今は個性の時代というふうに言われて、互いにその違いを認め合い、許し合って生きていかなければならない。そういうことが社会的に要求され始めてきた。で、このみんなが互いに違いを認め合い、許し合って生きていかなければならないという、そういうこの社会になっておるのにですね、人間が、その人間性そのものがまだ古い時代の、画一性の時代のこの人間性を持ってしまっておる。そういうこの社会が個性を求めておるのに、人間がまだ画一的な時代のですね、意識を持ってしまっておる。であるが故に、このちょっとした違いでですね、その違いを、個性を主張するという、そういうこのことがだんだんと増えてくるにしたがってですね、画一性を要求する心を持っておると、それが認められないっちゅうことで、急にその離婚という状態が、全世界的にこの激しい勢いで進行しておる。また、全世界的に言って、個性が認められない、許せないというような、そういうことでですね、幼児虐待も進んでいく。そして、この宗教の違いや民族の違いで激しい戦争が行われる。**

**これは近代、そういう理性的な考え方がですね、全人類を支配し始めたということから、この生じてくる違いを排除するという精神と、で、社会全体が個性の時代になってきておるのに、人間がその個性の時代に合った人間性を持っていない。こういうこの社会と人間性のずれというものがですね、極端に関係し合って、結果として、現実の社会の中で生きていけない。そういうこの状況にですね、多くの人間が陥って、その結果として、離婚の激増という不幸をですね、味わわなければならない。個性を認めなければならない時代になってきておるのに、夫婦がお互いに個性を認め合えない。なんで俺の言うことを聞かんのやと言ってですね、その相手に自分の考えを押し付けてしまう。そういう古い画一性を追求する理性のですね、影響を受けた人間性というものが個性の時代に対応できない。それがためにですね、お互いに責め合う。そういう状況でですね、多くの方々が自ら不幸をつくってしまってる。そういう状態にあるわけですね。で、これはまだまだですね、その離婚の激増も、幼児の虐待も、その勢いは止まらない。ますますそれが激しくなっていく。そういう状態にあるわけであります。**

**で、こういう現象を称してですね、人間が理性の奴隷となったというふうにですね、こう言うわけであります。人間が人間ではなくなってしまって、理性の奴隷となってしまった。そして、人間性をなくしてしまった。その理性の奴隷となった、人間性をなくしたということを人間性の破壊と言ったりね、心の喪失と言ったりするわけであります。互いに違いが認め合えない。また、違いが許せない。そういう状態が、この人間性が破壊された状態。あるいは、心の喪失、温かな、血の通った心がない。そういう状態だというふうに、この言われるわけですね。どうしたらいったいそういうふうなですね、この愛の欠如というふうな状況から脱却できるのか。そのことを考えるためにはですね、この相手が自分と同じ考え方になってくれないと、その人を愛せない。同じ考え方の人間しか愛せない。あるいは、同じ価値観の人としか仕事ができない。そういう状態はいったいどういうことなのかということなんですけど、この相手が自分と同じ考え方になってくれないと、その人を愛せない。相手が自分と同じ感じ方をしてくれないと、友達ではない。一緒にやっていけない。同じ価値観の人間しか愛せない。同じ宗教の人間しか愛せない。同じ民族の人間しか愛せない。こういう状態というのはいったいどういうことなのか。それは、この相手が自分と同じ考え方になってくれなかったら、その人を愛せないという、その人はですね、どうしてなのかといったら、その人は自分しか愛せない人だ。同じ価値観の人間としか一緒に仕事はできない。その人は自分しか認められない人だ。相手を、他者を認める、そういう意識のない人だ。自分しか認められない。自分のことしか考えられない。そういうこの自己中心的なですね、この人間である。そういうふうに考えなければならない。**

**ところが、この自分しか愛せないような愛、そんな愛で子孫が残せるはずはないと。愛というのは、男が女を愛し、女が男を愛する。そのことによって子孫を残す。そういうことのためにですね、愛というものは、この命から現れ出てくる、そういうこの現象であります。であるが故に、自分しか愛せないような愛で、どうして子孫が残せるのか。自分しか愛せないような愛は偽物の愛だ。ということは、今、全人類がですね、偽物の愛に陥って、しかも、その偽物の愛を本当の愛だと思ってしまってる。そのことによって、多くの方々が自ら不幸を自分の人生に招き寄せておるというふうに言っていいような状況だ。相手が自分と同じ考えになってくれたり、相手が自分と同じような感じ方をしてくれたら嬉しい。だけど、それは、その人は自分しか愛せない、自己中心的な、自己チューの人間である。他人のことなんか、この思いやる、温かい、血の通った心をなくしてしまったこの冷酷な人間だ。そういう人がですね、自分しか愛せない。だから、そういう人が親になればですね、必ず幼児虐待に陥ってしまいます。本当は可愛いはずの自分の産んだ子どもをですね、母親がその自分の子どもが自分に懐かない、言うことを聞かない。そのことによってですね、ノイローゼに陥って、子どもを育てる自信がなくなってしまって、子どもを殺してしまう。そういう不幸を自ら招いてしまってるわけですね。自分しか愛せないようになってしまった女は、そういうことになるわけであります。また、自分しか愛せないようになってしまった男は、自分の子どもの反応にですね、むかついてしまって、そして、この自ら自分の子どもの首を絞め殺してしまう。そういうこのヒステリックな状態に陥ってしまう。これはものすごく恐ろしいことです。**

**だが、残念ながら、今、全人類はね、そういう状況にある。全世界を見てもですね、この民族の違いで戦争をし、いろんなテロ活動をやっておりますし、また宗教の違いが大きな戦争に発展するという状況になっておりますし、また、経済体制や政治体制の違いによって世界は対立をしておる。そういうこの状態です。これはまさに、この本当の愛を見失ってしまってですね、人間が理性の奴隷となって、そして、この理性化されてしまった愛、自分しか愛せない愛、自分と同じ考え方の人間しか愛せない愛。そういう理性化された愛に人類が、全人類が陥ってしまった。それがためにですね、今、こういう不幸が全人類を襲っておるという状況になっておるわけであります。とにかく、まず、われわれが今、自分のために、自分が幸せになるために意識しなきゃならないことは、今、自分の持ってる愛は全部、偽物だ。そのことをですね、はっきりと認めることです。同じ考え方の人間しか愛せない。相手が自分と同じように感じてくれて、同じように考えてくれないと、その人と一緒に生活はしていけない。同じ価値観じゃなかったら、敵になってしまう。そういうこの愛というのは、偽物の愛だ。そのことをですね、まずわれわれは自覚しなければならない。**

**そして、そういう状態というのは、人間が理性の奴隷になってですね、人間ではなくなってしまったという状態である。人間が理性化されてしまって、人間ではなくなった。なぜ人間は理性化されてしまったのか。なぜ人間は理性の奴隷になってしまったのか。それは、この理性というのは、完全な能力である、完璧な能力である。人間は不完全だ。だから、不完全な人間は、完全な理性に従わなければならない。理性的に考えて正しいと思うことをしなければならない。理性的に考えて正しいと思うことができない人間は、意志の弱い、駄目な人間だ。そういうふうなですね、価値観に近代、人類は陥ってしまった。理性で考えて正しいと思うことを人間はしようとする。その結果として、完全に人間は理性に支配され、理性の奴隷になってしまった。そして、この自分のしたいことはなんなのかを忘れてしまって、しなければならないことにこの支配されてしまってですね、その苦しい、つらい、窮屈な、そういう生き方をですね、自分に強いるという、そういうことになってしまった。仕事をする上でも、情熱が湧いてきて仕事をするんじゃなくって、ただしなければならないから、しろと言われてるからしてるというだけの仕事の仕方にほとんどの人が陥ってしまっておる。それを称して理性の奴隷というのである。人間ではなくなってしまったんだ。**

**人間というのは、自分の命から欲求、欲望、興味、関心、好奇心、何かしら命から湧いてくる欲求があって、その欲求に従って人間が行動するとき、そこに幸せというですね、そういう気分が湧いてくる。したいことをするのが最高の幸せだ。命から湧いてくるものがなくなってしまったら、人間は行動ができない。命から湧いてくるものある限りにおいて、人間は行動し続けるのである。何がしたいのと言われてですね、いや、べつに大して何がしたいっちゅうことはありません。それが人間ではなくなった証明なんですよ。それが理性の奴隷となってしまった人間の証明であります。だけど、ほとんどの人が今、そうなってるんだ。大人でもね、何がしたいのって言われて、いや、べつに今、大して何がしたいっちゅうことはありませんと。そういう大人がほとんどなんだ。子どももそうだ。しなければならないことばっかりであって、したいことがなんなのかわからなくなってしまった。だから、自分で行動できない。命令されたらなんでもする。命令されなければ、まったく動かない、じっとしてる。何していいかわからない。そういう状態にほとんどの人が陥ってしまってる。これが理性の奴隷となって、人間をやめてしまった人間たちの姿なんですね。**

**だけど、それはごく一部分の人間がそうなってしまったんじゃない。ほとんどの人間がそうなってしまったんだ。自分の命から激しく突き上げるように湧き上がってくる抑え難き欲求、抑え難き情熱というものをみんななくしてしまった。だから、なんとなくみんな、仕事をするんでも、つまらなそうな顔をして仕事をしてる。生きることそのことがつらそうである。それは命から湧いてくるものがないからだ。だけど、やっぱり会社に入ればね、会社から与えられる仕事をさせられてしまうし、しなければならない。それはどうしてもそういうことがですね、たくさん出てくる。だけど、そのときにですね、ただ言われたからするんじゃなくって、会社から与えられた仕事、あるいは会社から課せられる数値目標、そういうものをどういうふうにですね、自分の情熱と結び付けながら、自分の欲求を結び付けながら仕事をしていくか。とにかくそういうことでですね、自分がこの会社から与えられる仕事というものに対して情熱を持って、それにこう臨んでいこうと思ったならばですね、この会社から与える目標と、自分のこの欲求、欲望というものをどう結び付けるかというね、そういう作業を自分の中でしなければなりません。**

**すなわち、会社から与えられるその仕事を自分がやったならば、自分のこの人生がどう変わるか。どれだけ、その収入が増えるか。あるいは、どれだけ地位が上がるか。そのことによって、自分の能力がどんだけ伸びるか。またそれをこなすことによって、自分が人間としてどの程度、成長できるのか。そういうですね、自分のこの個人的な喜びというものと、会社から与えられるこの仕事というものを結び付けることによってですね、与えられたから、それをするんじゃなくって、自分の欲求を実現するためには、その仕事をこなすことが大事なんだ。その仕事をこなせば、自分の欲望が実現できる。自分のしたいことができる。より素晴らしい人生を生きられる。もうそういうふうなですね、結び付け方というものを自分でしなければならないし、それを覚えないと、そういう社会において、自分の欲求と社会から要求されるこの事柄とをですね、結び付けて生きるという生き方を覚えないと、社会の中で、会社の中で、この幸せになる、あるいは成功していくというふうな、そういうこの生き方をすることができません。**

**とにかく基本的には、この自分の欲求を、命から湧いてくる欲求がなくなってしまったら、人間は行動できません。命から湧いてくるものがない人間がですね、何かしようと思ったら、残念ながら理性で自分の肉体にむちを打って、無理やりに自分の肉体を動かさなければならない。それはつらい、苦しい人生だ。だけども、自分の命から欲求が湧いてくる。そういうこの力に沿ってですね、仕事をすれば、自分のしたいことをするんだから、そこには喜びがある。生きがいがある。幸せだっていう感じが湧いてくる。自分のしたいことをするのが幸せなんだ。したいことができないのは不幸だ。したいことがなかったら、それは奴隷だ。したいことのない人間は、人に与えられたことをさせられてしまう。だけども、残念ながら、多くの人が人に与えられたことをさせられてるという仕方でしか働いていない。いや、奴隷的な労働しかしていない。それでは、あまりにも人生はさみしい、情けない。自分の命から湧いてくる欲求、自分のしたいこととですね、会社から与えられる数値目標や業務の内容というものを結び付けながら、その会社から与えられることをすれば、自分のどういう望みがかなうのか。自分にどういうこの未来が訪れるのか。自分の能力の人間性がどの程度、成長するのか。そういうこの自分の個人的な喜びとですね、会社から与えられる、客観的な、そういうこの業務とをどう結び付けるかということをちゃんとこのマネジメントしていく。ちゃんとそれを結び付けていく。そういうこの生き方をですね、覚えないと、われわれは、社会の中で納得のいく幸せな、そういうこの人生をつくっていくことができません。**

**だけど、そういうところまでは学校で教えてくれないもんですから、ほとんどの人はですね、自分の欲求と会社の仕事とがですね、結び付かない、合わんということで、その業務に情熱が入らない。あるいは、会社から与えられた仕事を単に苦痛と考えて、そして、その自分の人生と会社の仕事とを別々のものとして考えてしまう。そういうこう自己分裂に陥ってしまうわけですね。だけど、基本的に言って、自分のしたいことがなかったならばですね、会社から与えられる業務と自分の欲求とを結び付けるっちゅうようなこともできません。そうなれば、結果としてはもう奴隷のごとく、一生、この使われっぱなしで、自分の人生というものを生きられない。ただただ、この他人から支配されて生きて死んでいくというふうな状況に陥ってしまう。その意味でもですね、一人一人がやっぱり、人生における夢というものを持って、何かしたいこと、こうなりたい、こうしたい、そういうものをですね、激しく持つことが、今の時代には要求されるわけです。それが個性の時代を迎えたということなんですね。一人一人、みんな自分らしく生きるということを考えなければなりません。自分らしく生きるっちゅうことは、自分のしたいことをすることなんだ。自分のしたいことを持っておって、初めてですね、社会でいろんな仕事が自分に与えられたとき、自分のしたいことと、その仕事とを結び付けて、その仕事ができたならば、自分のどういう夢がかなうのかという、そういう仕方でこの仕事に情熱を傾けながらですね、仕事を通して自分の人生を実現していく。そういう生き方ができることになるわけですね。**

**そうなれば、この会社というのはですね、単にその会社の命令に従わなきゃならんっちゅうんじゃなくって、自分の人生のこの目標を実現していくためにその会社を利用する。そういうふうなですね、生き方ができるわけであります。その会社に入らなければ、その会社のそういうこの仕事とか、人間関係とかに出合えない。またその会社に入らなければ、その会社独特の問題とか悩みに出合えない。問題、悩みというのは、自分を成長させるために出てくるんだ。問題、悩みがなかったならば、人間は成長しない。だから、その会社から出てくる問題、悩みというのは、その会社に入った人間しか体験できないもんだ。そういうこの自分がその会社に就職するという、そのご縁に基づいてですね、出てくるそういう問題、悩みにこの立ち向かっていく。そのことによって、自分を成長させていく。それがその会社に勤めたこの自分の人生の意味である。だから、その会社を利用しながら、自分を成長させていく。会社から与えられる仕事を利用しながら、自分の個性ある人生をつくっていく。そういう生き方をですね、個性の時代というものはしていかなければならない。それが個性の時代における個人と会社との関係性であります。**

**画一性の時代のようにですね、この会社に自分が従属していくというですね、そういうこの関係性じゃなくって、そういう縦型の関係性じゃなくって、この自分の人生を素晴らしいものにしていくためにですね、会社を利用する。会社から与えられる仕事をこなしていくことによって、自分の能力を成長させていく。会社から送ってくるさまざまな人間関係の問題に苦しむことによって、その問題を乗り越えて自分の人間性を成長させていく。そして、会社から与えられる業務をこなしていくことによって、会社の中で地位が高くなっていく。そのことによって、この給料も増えるし、また社会から信頼され、尊敬されるような立場ができる。そういうふうにして、自分の人生をつくっていくんだ。会社というのは、自分の人生の舞台である。会社の命令に従うんじゃなくって、俺がその会社を利用してのし上がるんだ。そういうふうなですね、人生というものをこれからは考えなければなりません。そういう意味においてもですね、まずこの自分の人生の目標、どうなりたいのか、何がしたいのか、何が欲しいのか。何が手には入ったら自分は納得するのか、何が手に入れば自分は幸せなのか。そのことを考えてですね、そして、自分が幸せと思うその事柄と、会社から与えられる仕事とをどのように結び付けながら仕事をしていくか、生きていくか。そういうふうにこう考えていかなければなりません。**

**まずはとにかくは、このわれわれがですね、理性の奴隷から解放されるためには、そういう自分の命から湧いてくる欲求というものをまずちゃんと確認しなければならない。いったい自分の幸せとはなんなのかということをね、もっともっと自分に問い詰めてですね、これさえあったら、自分は幸せだ。そのことをですね、ちゃんとまず持たなければならない。だけど、これさえあったら幸せという、そのこれさえあったらというものが、本当に、本当に自分の幸せなのかということですね。本当の自分の幸せとはいったいなんなのか。そのことをもっともっと突き詰めてね、本当にそれで納得できるのか。そのことをちゃんと自分に問い詰めてですね、そして、この幸せを手に入れる。そのことのために自分はいろんなことをするんだというですね、そういうこの生き方の基本というものをまず押さえなければならない。そうすればですね、会社から与えられる仕事も、ただ命令に従って何かするという、そういうこの義務と責任のね、やらされてるという、そういうこの仕事の仕方じゃなくって、自分の理想を実現するために、自分の幸せを実現するために、会社から与えられるその仕事を利用して、そして、自分の幸せを実現するんだ。そういうふうなですね、生き方ができるようになってきます。**

**で、実際問題、社会の中でね、そういうこの自分が幸せと思えるような状況にこう近づいていってる人というのは、そういうこの工夫の仕方をして、そして、この自分の人生と会社の仕事とをちゃんと結び付けながら生きるという、そういう仕方をこの暗中模索しながらつかんだ人たちがですね、この会社の仕事に情熱を燃やして、自分の人生をつくっていくという仕事をするわけであります。まず、そのわれわれがですね、自分と同じ考え方の人間しか愛せないというふうな、そういうこの状況になってしまった、理性の奴隷となってしまった、そういう状況からですね、自分を解放して、本当にこう真実の愛に目覚めていくというふうな、そういう状態に自分を持っていこうと思ったならば、われわれはまず、その自分自身が命から湧いてくる欲求に従って生きるというね、そういうこの生き方の基本というものを、まず自分の中に取り戻さなければならない。何かしら、常に自分にはしたいことがある。なりたい目標がある。自分の幸せとはこうだ。だが、その幸せを実現するために生きようというですね、そういうこの意欲がですね、自分の命から湧いてくるという、そういう状態の自分というものを取り戻さないと、われわれは幸せな人生というものを生きることができません。**

**そのことがちゃんとできてくるとですね、われわれは理性化された愛、自分と同じ考え方の人間しか愛せない。そういうふうなですね、状況から脱却できる。とにかく今、愛すら理性化されてしまって、自分自身が理性の奴隷になってるということは、愛すら理性の奴隷になってしまって、愛すら理性化されてしまってる。そのことによってですね、このわれわれは自分しか愛せないという、そういうこの状態になってしまってるんだ。だけど、本来、愛というのは、男が女を愛し、女が男を愛するという、そういうこの状態がですね、本当のこの愛の基本である。だから、自分しか愛せないような愛では、子孫は残せない。だから、自分しか愛せないような愛は、偽物の愛だ。気の合う仲間と付き合っていったらいいんで、気の合わんやつとは無理に付き合わんでもええわ。これが偽物の愛なんですよね。それは自分しか愛せない人間なんですよ。ちっぽけな人間なんだ。その愛を偽物とこう認識できるかどうかですね。相手が自分と同じ考え方をしてくれたらうれしい。確かにそれはうれしいかもしれないけども、だけども、それは自分しか愛せないという状態なんだと。**

**子どもが自分の言うことに素直に従ってくれてですね、自分に言うことに服従してくれたら、親はうれしい。だけど、それは親にとって都合のいい子なんだ。だけども、子どもというのはですね、なんのために生まれてきたのか。子どもが生まれてくるのは、親の命令に従うためではない。子どもが生まれてくるのは、歴史をつくるためだ。子どもが生まれてくるのは、新しい時代をつくるためだ。だから、子どもというのはですね、この新しい時代をつくるために親とは違う新しい考え方を持たなければならない。親とは違う新しい欲求を持たなければならない。だから、子どもの命には、生まれながらに反抗するという、この生き方がですね、ちゃんと命にプログラムされて生まれてきてるんですね。子どもには第一反抗期、第二反抗期というふうにいわれるですね、そういう時期がちゃんとあってですね、そして、反抗することによって、自分というものを確立していく。そういう生き方をしなければならないように、本能的にできあがってしまっておる。だけど、理性化された親は反抗を嫌う。理性の奴隷となった先生は反抗を嫌う。理性の奴隷となった社会は反抗を許さない。反抗を嫌う。特に権力者は自分に逆らう者を嫌う。であるが故に、社会を保守化してしまって、発展しなくなってしまう。これが社会の閉塞感である。何かしら新しいことをしようとすると、それを阻害、阻んでしまうというね、そういう状況に陥ってですね、で、閉塞感というものが漂ってくる。**

**だけど、子どもというのは常に新しい時代をつくるために、歴史をつくるために生まれてくる。歴史をつくろうと思ったら、今まで誰もやったことのないことをですね、今まで誰もやったことのないことをしなければならない。いつまでも親の言うことを聞き、いつまでも先生の言うことを聞き、またいつまでも大人に従っておったのでは、新しい時代はつくれない。歴史はつくれない。であるが故に、親が子どもを育てるということはですね、子どもに反抗を許すことである。反抗する力を利用しながら、子どもを一人前の立派な大人に成長させるという、この力が教育力というふうに言われるんですね。そやけど、教育するっちゅうことは、自分の言うことを聞かせることだと思ってしまってるような先生が多い。これはもう原理的にいって教育とはなんなのかを忘れてしまってるんだ。教育というのは、この人を育てるということがですね、基本になるのであって、教えるということは手段でなければならない。育てるために教えるんだ。育てるということはなんなのかといったら、その子の中にある、その子らしいものを引き出してあげる。そういうことがですね、教育、Educateするということの本来の意味であります。**

**Educationというのは、ラテン語に戻すと、エドクタムという言葉になるんですけど、エというのは外へ、ドクタムとかドクタスというのは引っ張り出すという、そういう意味を持ってる言葉なんですね。ですから、Educateするということの語源的な意味は、内にあるものを引き出すという、そういう意味を持っておるわけであります。その子の天分を引き出してあげる。その子の持ち味を引き出してあげる。その子らしさをつくってあげる。それが実はですね、教育というものの本来の意味である。だから、教え過ぎては、その子をつぶす。だけど、教えなければ、その子の中にあるものを引き出してあげるという、そういう作業もできない。教えるのは、その子の中にあるものを引き出してあげるためだ。だから、それを愛というんですね。自分の考えを押し付ける。自分と同じ考えをつくってしまうというのが愛ではない。教育が愛だというのは、他者中心的な心の働きである、愛という心を用いて、そして、その子の中にあるものを引き出してあげる。その子らしい、その子にしてあげる。それが愛なんですよね。自分の気に入る人をつくったら、それは愛ではない。それは支配だ。その子の中にあるものを引き出してあげて、その子らしい人間に成長させてあげる。それが愛の教育、教育は愛だといわれる、そういうこの教え方であります。**

**子どもというのは、常に歴史をつくるために生まれてくる。だけど、ほとんどの親はですね、その子どもが逆らうということを嫌う。だけど、子どもは、どんどん、どんどんですね、賢くなっていますので、親に嫌われたくないと思ってですね、従順さと素直さを装うんですね。だから、お父さん、お母さんは、家におるとですね、子どもが自分の言うことをよく聞いてくれるもんですから、この子はいい子だと思ってる。だけど、その親に反抗しない分だけですね、ストレスがたまってるもんですから、いったん家の外に出たら豹変してしまってですね、とんでもない行動をし始める。学校に行っても、学校の先生に嫌われたくないし、学校の先生を怒らせたくないので、子どもはいい学生を演じる。我慢してる。家でも我慢し、学校でも我慢し、職場でも我慢する。だから、そういう所から解放されてですね、誰も知らないような、そういうこの所へ行ってしまうと、豹変してしまってですね、そして、時には反社会的な行動に走る。そういうこの状態になってしまうことになることもある。**

**そういうことを考えてもですね、この愛というのは、決して相手が自分と同じ考え方になってくれなかったら愛せないという愛ではいかんということをですね、この肝に銘じてわかってないと、子どもすら育てる力をなくしてしまいます。子どもは親に反抗しながら成長していって、反抗することによって、俺の考え、俺の欲求、俺の価値観というものをこのつくり上げて、そして、俺というものをしっかり持って、社会に出ていくという、そういう生き方をするように、命というのはちゃんとプログラムされてるんですね。だけども、どこに行ってもですね、従順さと素直さを要求されるという、そういう状態が長く続きましたので、この子どもたちは、みんな自分というものを出せない。そのことによってですね、結果として何をしていいかわからない。したいことが何もないというふうな、そういう状態の人間にほとんどなってしまった。しかも、またその社会にはですね、この欲望はいかんとか、無欲がいいとかですね、そういうふうな人間観もあったりなんかして、欲面を張ったらいかんと。欲のない人間は立派な人間や。そういうふうなこの間違ったですね、人間観が、仏教や、キリスト教や、儒教や、老荘思想から人間に押し付けられた。もうそのことによってですね、ほとんど子どもたちは無欲になってしまった。無欲になって、立派な人間になったのかといったら、全然そうじゃない。無欲になって、何をしていいかわからない。理想をなくしてしまって、目標をなくしてしまって、ただ命令されるだけで生きてる。そういう状況に陥ってしまった。それが無欲の状態の人間だ。それが無欲の子どもたちの姿だ。何が立派な人間なんだ。どうして無欲が、なぜ立派なんだ。欲のない人間はどうして生きられるんだ。欲があってこそ人間だ。したいことがあってこそ人間だ。こうなりたい、こうしたい。それがあってこそですね、人間としての人生だ。**

**ところが、この理性による画一性の結果ですね、残念ながら人間は、そういうこの本当に人間として幸せを感じることができるようなですね、生き方というものを奪われてしまった。そして、理性的に命令されることしかできないような、なんの欲も湧いてこないような、そういうこの状態にさせられてしまった。宗教的に言えば、無欲ということは立派なことである。素晴らしいことである。だけども、それは宗教の目標であって、人間の目標ではない。人間は激しい欲求が命から湧いてくることによって人間なんだ。だけども、自分のしたいことをするのは、これはわがままであり、またこの命から湧いてくる者だけで行動するんじゃ、これは野獣である。人間は理性を持っておる。だから、自分のしたいことをどうすれば他人に迷惑掛からない方法で実現できるか。そのことを考えることによって、愛が芽生えてくる。人のことを考えることによって、愛が芽生えてくる。愛というのは、他者中心的な心の働きですからね。人のことを考えて、思いやりを持つというところからですね、愛の心は芽生えてくるわけであります。自分と同じ考え方に相手がなってくれなきゃいかんっちゅうんじゃなくって、自分とは違う考え方を知ろうとする、認めようとする、わかろうとする。そこに、血の通った、温かな心という愛が存在するわけですね。人のことを考える。そういうこの気持ちがなかったならば、愛という、血の通った温かな心というのは存在しません。**

**とにかく今ですね、人類は愛を見失ってしまって、そして、自分しか愛せないような、偽物の愛に陥ってしまっておる。その結果としてですね、人間は理性の奴隷となってしまった。人間は理性の奴隷となってしまうことによって、離婚の激増と、幼児の虐待と、高齢者の虐待と、違いを理由に殺し合うという戦争が、この世界あちこちで起こってきておる。で、こういうこの理性によってつくられてしまった問題というものを乗り越えていこうと思ったならばですね、われわれはもう理性の力に頼るわけにはいかない。理性に頼れば頼るほどですね、こういう問題はどんどん出てくるわけですから、だから、理性によってつくられた問題を乗り越えていこうと思ったならば、われわれは理性よりも、より高度な、より素晴らしい力をですね、この求めなければならない。だけども、残念ながら、まだ人間は、理性を超える、理性よりも素晴らしい力というものが存在することを知らない。理性が最高だと思ってしまってですね、理性よりも、より素晴らしい力というものがなんなのかを知らない。だけども、このようやくわれわれはですね、この離婚の激増、幼児の虐待、高齢者の虐待、戦争というものを契機にして、この理屈を超える、理性を超える素晴らしい力がなんなのかを、今、感じ始めておるわけですね。それがその子どもたちの言葉から出てくるですね、理屈じゃない、心が欲しいという、この叫びであります。**

**心が欲しいっちゅうことは、自分の気持ちをわかってもらいたいっちゅうことなんですよね。自分の実感や本音をわかってもらいたい。心が欲しいとはいったい何が欲しいのか。それは愛されたい、わかってもらいたい、認めてもらいたい、褒めてもらいたい。それが心が欲しいという叫びのですね、内容である。認めてもらいたいということも、わかってもらいたいということも、褒めてもらいたいということも、愛されたいんだ。愛を求めてるんだ。ようやくそういう叫びがですね、人間の中から出てきておる。これはいったいなんなのかといったらですね、理屈を超える力は愛だけだ。理性に勝る能力は愛だ。そのことをですね、今、人間はうすうす感じ始めてるわけですね。愛こそ理性に勝る力である。理性によってつくり出された問題は、理屈を超える、理性を超える、愛の力によってしか解決できない。そのことをですね、今、本人はわからなくっても、命が感じ始めてるんですよ。理屈を超える力は愛だけだ。愛の力を成長させなければ、今の社会における問題は何一つ乗り越えられない。離婚の激増を止めることもできない。幼児の虐待を防ぐこともできない。高齢者の虐待を防ぐこともできない。対立や戦争を乗り越える道をつくっていく力も持てない。**

**理性によってつくり出された問題を乗り越えていくためには、愛しかないんだ。そのことをですね、今、人間の命が感じ始めて、叫び始めておる。その結果、何が起こってるのかといったらですね、ジベタリアンであります。あの地べたにべたっと座ってしまう子どもたちが、理屈を超える力は愛だけだ。愛を成長させなければ、人間は救われない。そのことをですね、ジベタリアンは行動をもって、ある意味で命を懸けて、命を通して語ってるわけであります。言葉では語れないというか、ジベタリアンの人たちは、ジベタリアンってなんなのかを知らないでああいう行動をしておる。だけども、あれを哲学的に解釈したらどうなるかといったらですね、なぜ彼らは地べたに座るのか。ヤンキーというのは、まだ座っとるというか、しゃがんどるだけだったんですけどもですね、今のジベタリアンという新しい種族は、地べたにべたっとこう、お尻を付けてしまう。新しい種族だ。なんでそういうことを、このしなきゃならんのか。それはですね、これまでの理性による支配と命令と管理の教育という、この父なる天の厳しい教育に疲れ果ててしまってですね、今、子どもたちは、自分たちを無条件に受け入れてくれる、母なる大地の愛を求めてるんだ。なぜ地べたに座るのか。地面というのは無条件に自分を受け入れてくれる場所である。無条件に自分を受け入れてくれる場所だから、子どもたちはホームレスの方々と同じようにね、地面に座る、寝る。そういうことをですね、しておるわけであります。**

**地べたに座るのは、自分を無条件に受け入れてくれる、母なる大地の愛を求めてるんだ。ということは、あのジベタリアンという子どもたちの行動はなんなのか。理性の時代よ、さようなら。愛の時代よ、いらっしゃい。そのことを彼らはですね、命で語ってるんだ。その彼らの行動の意味をですね、われわれはちゃんと知らなければならない。単にあれをですね、古い大人たちの倫理、道徳に照らし合わせて、みっともない。なんというだらしないことをやってるんだと言ってですね、非難をしておったら、それは歴史というものがわからない、時代を見る目のない大人の悲しい姿だ。新しい現象は、常に未来を語りながらやってくる。何かしら新しい行動を示す、あるまとまったそういうこの現象、行動が出てきたならばですね、それはある意味で、歴史のささやきだということをですね、感じなければならないし、知る必要がある。そのことによって、そのジベタリアンの方々にですね、そのことをわからせてあげて、そのことを教えてあげて、ああ、自分たちが、なぜそういうことをなんとなくやってしまってたのか。ああ、そういう意味があったのかということを知ることによって、彼らは愛の時代の戦士としてですね、この新しい時代をつくる先頭に立った行動をし始めることになるかもしれません。**

**今、その青年たちにですね、愛国心がないと言って、また大人たちは嘆いておる。国に対する愛がないと言って嘆いておる。本当に今、若者たちに国に対する愛がないのかと言ったらそうじゃない。オリンピックで日本選手が金メダルを取ったら、みんな飛び上がって喜んで、歓声を上げて、そして、国旗を掲揚して、『君が代』を歌っておるんだ。強制的に歌わされるですね、学校や職場では歌わない。だけども、自分の命の喜びがあったならばですね、みんな飛び上がって喜んで、国旗を掲揚して、誇らしく国家を歌うのである。決して若者に愛国心がなくなったのではないんだ。日本人は、日本の若者は、これからアメリカ人に代わって世界の指導者にならなければならない。いつまでもちっぽけな、国益優先の愛国心を持っておったのでは、世界の指導者になれない。世界のために働けない。だから、今の若者たちは、愛国心をなくしたんじゃなくって、愛国心を超えてしまったんだ。彼らは愛国心を超えて、より大きな愛に生きようとしておる。それは人類愛である。世界愛である。もう彼らの心の中には世界が入っておるんだ。人類という、そういう視野に立って、彼らは行動をし始めておるのである。であるが故に、ちっぽけな愛国心、国益優先の、自分の国のことしか考えないような、自分のことしか考えないような、ちっぽけな愛国心を彼らは乗り越えてしまったんだ。彼らはもうすでに国境を越えた子どもたちである。愛国心を超えて、人類愛に生きようとしておるんだ。**

**それが古い大人たちから見たらですね、情けないと。国の恩を忘れたんか。愛国心がないっちゅうて嘆くわけですね。これは古い価値観で新しい時代を見てるから、新しいものが受け入れられない。そういうこの状態になってしまっておるわけであります。なぜそういうふうに考えなきゃならんのか。それは大人たちもね、実は愛国心がないんですよ、もう。言ってみれば。元旦だっていうのにですね、どの家にも国旗が掛かっていない。国家の祝祭日にですね、誰も国旗を掲揚しない。昔はですね、国の祝祭日というのは、みんなどの家にもね、国旗が揚がったもんなんですよ。国旗を揚げて、その祝祭日をお祝いしたもんなんですよ。だけど、子どもたちだけじゃない。大人たちも国の祭日に国旗を揚げようとしない。ほとんどこの家庭から国旗は消えてしまった。職場にはまだ国旗があるかもしれませんけど、職場でも納屋というか、倉庫にしまったまま、なかなか出さない。大人たちもすでに国旗を忘れてしまっておる。大人たちも『君が代』を歌うことを忘れてしまっておる。なぜそうなってしまったのか。なぜ日本人は、そういう状況に今、なっておるのか。**

**それはちっぽけな愛国心を超えなければならないからです。これから日本人は、アメリカに代わって世界の指導者にならなければならない。だから、国益優先の自分の国が勝ったらうれしい。他の国が負けたらうれしい。他の国が失敗したら自分が喜ぶような、そういうちっぽけな愛国心をですね、捨ててしまったんだ。愛国心がある限り、戦争はなくならない。これはゲーテの言葉なんですよ。文豪ゲーテはですね、この平和な世界というものを願って、戦争というのは愛国心がつくり出すもんだ。愛国心をなくさなければ、戦争はなくならないと言った。だけども、ゲーテの時代まではその言葉でよかったんですけど、今はそうじゃない。愛国心を超えなければならないんだ。愛国心をなくす必要はないんだ。愛国心を超えて、人類愛に生きる。そのことによってしかですね、戦争はなくならない。平和な世界はやってこない。まだゲーテの時代においてはね、愛国心がある限り、戦争はなくならない。愛国心が戦争の原因だ。そういうふうにこの言っていいようなですね、そういうまだ時代だった。**

**だけども、この愛国心をなくさなければですね、戦争はなくならないという表現はもう過去のものだ。これからわれわれは、愛国心を超えなければ、愛国心を超えなければ、世界の平和はやってこないというふうに叫ばなければならないんだ。そのとおり、実際、今の日本の若者たちは、すでに愛国心を超えた。国旗を超えた。そして、今、人類愛に生きようとしておる。われわれはそのことを評価するべきである。それを情けないとか、悲しいとか言ってる大人のほうが、もうすでに時代遅れのですね、感覚しか持っていないんだ。確かに新しく生まれ出てくる子どもたちは愛を叫んでおる。愛の必要性を叫んでおる。理屈を超え、理性に支配された、理性の奴隷となった人間を救い出すためには、愛の力しかないことを、もう人間の命は語り始めてるんだ。であるが故に、これからの時代をですね、生きていこうと思ったならば、われわれは愛の実力を磨き、愛の力を成長させていってですね、そして、愛によって理性がつくり出す問題を乗り越えていくという、そういう力をつくっていかなければならない。そのことなしには、これからの会社という組織もですね、真の団結力を持った、強い組織にはならない。愛の力によってしか、会社というこの組織はですね、一個の命として働き始めることはない。今こそ、この人生を幸せに生きるためにも、会社の活力をつくっていくためにも、世界の平和を実現するためにも、家庭の平和を実現するためにも、今、われわれに望まれてる力は、愛を理性に勝る問題解決能力を持った実力として養っていくことである。愛の力を成長させること以外に、われわれは自分の人生を幸せにしていくというですね、そういうこの能力を持つことができない。今のままでは、自ら自分の人生を不幸にしてしまう。もう理性的になればなるほどですね、われわれはこれから自分が不幸になっていく。そのことをですね、味わわざるを得ません。理性的になればなるほど、会社は崩壊します。人間関係が寸断されてきます。個性の時代なんですからね。みんな違うんですからね。それが目立ってくるんですから。自分と同じような人としかやっていけないということになれば、個性の時代はみんなばらばらですよ。だから、会社はばらばらになりますよ。団結力なんていうようなものは、もうどこへいったのっちゅうことになってしまいますよ。**

**違うものをまとめていくためにはどうしても愛が必要なんだ。他者と共に生きる力が必要だ。個性の時代というのは、お互いに違いを認め合って、許し合って、そして共に生きていくという、それが個性の時代ですからね。同じ考え方の人間と生きていったらいいんだ。これはもう過去の画一性の時代なんだ。理性の時代なんだ。個性の時代というのは、お互いに違う。だから対立するんじゃなくって、個性の時代というのは、違うんだから、違うものをお互いに持ってるんだから、教え合えるじゃないか、学び合えるじゃないか、助け合えるじゃないか、協力できるじゃないか。その精神が会社の団結力をつくっていくわけであります。違うから嫌やという、そういうこの画一性の時代のですね、理性の時代の意識を持っておったら、会社はますます駄目になります。団結力なくなります。違うんだから、学び合える。違うんだから、教え合える。違うんだから、助け合える。そういう精神をどういうふうにですね、会社の中につくり上げていくか。そこにですね、これからの個性の時代をこの土台としながらですね、会社というまとまった組織で動いていくという、そういうこのことを考える筋道がですね、そこにあるわけですね。**

**とにかく、まずわれわれは、今、われわれが持ってる愛は偽物だ。俺の愛は偽物だ。そのことをまずわかってもらいたい。そして、理性によってつくり出されてくる問題を乗り越えるためには愛しかないということを次にはわかってもらいたい。愛こそ理屈を超える力なんだ。理性に勝る力は愛しかないんだ。愛こそ理屈を超える力なんだ。なぜ愛は理屈を超える力だと言わなければならないのか。それは理性という能力は、人間も持っておる肉体の中の脳という部分に限定された能力、それが理性である。理性という能力は、人間の肉体の中の脳という部分に極限された、限定された能力なんだ。だけど、愛は命の能力なんだ。愛は命の力なんだ。なぜならば、命は愛によって生み出される。命は愛によって育まれる。命は愛によって満たされるんだ。愛なしには、人間は人間にはならないんだ。愛なしには生きられないんだ。愛がなかったら、人間はおぎゃあと生まれた瞬間に死んでしまう。また愛なしには、男女の愛なしには子どもは生まれない。セックスレス夫婦になってしまって、結婚を拒否すれば、子どもは生まれないんだ。愛があってこそ、子どもは生まれる。愛があってこそ、自分は生まれた。人間みんな愛の子だ。愛によってこの世に誕生した命、それがわれわれだ。命の本質は愛なんだ。愛は命の力だ。命は愛によってしか生まれない。愛し合わなければ生まれないんだ。そして、その愛によってしか育まれないんだ。親に捨てられてしまったら、子どもは死んでしまわざるを得ない。幸いにもわれわれは捨てられなかったから、愛によって育てられたから、こうして生きておられるのである。**

**お父さん、お母さんがね、なんにもしゃべらない、ただわあわあ泣くだけの自分を、その泣き方によって、ああ、こうだな、ああだなと悟ってくれて、他者中心的な愛の心によって、赤ちゃんの泣き声で要求を聞いてくれて、いろいろやってくれて、われわれはようやく成長して大人になったんだ。愛によって育てられたんだ。愛によって育まれたから、今日があるんだ。そして、われわれの心は愛によって満たされるんだ。愛なしには、人間は人間たり得ない。人間ではあり得ない。愛こそ命の力である。理性は命の中の、肉体の中の、命の中の肉体の中の脳という部分に限定されたちっぽけな能力だ。われわれは人間なんだ。理性なんかに支配されてどうするんだ。理性は人間が持っておる能力の１つだ、部分だ。人間は理性よりも、もっと大いなる存在だ。人間は理性よりも、もっと複雑な存在だ。人間は理性を持ってるけど、感性もある。肉体もある。人間は理性と感性と肉体という３つの要素が有機的に絡み合って、人間という命をつくっておるのである。人間は理性よりもより高度で、より複雑で、より素晴らしい存在なんだ。理性なんかに支配されてなるものか。理性なんかに支配されてはいけない能力なんだ。**

**反対に人間が理性を支配し、人間が理性を使いこなして、人間が理性を手段能力に使って生きていかなければならない。理性は人間の持っておる能力の一部分なんだ。理性は人間の持っておる能力のすべてじゃないんだ。理性は人間の持っておる能力の一部分なんだ。理性も大事だけど、感性も大事、肉体も大事。さらに命がもっと大事だ。命からすれば、理性はごくごく小さな部分を占める人間の力の一部にしかすぎない。理性がすべてじゃない。人間が理性を支配しなければならない。人間は理性を使いこなしてですね、生きていかなければならない。理性の奴隷なんかになっておって、何がいいものかということをですね、まずは知らなければならない。だけど、理性はいらんのじゃない。やっぱり人間は理性を持っておるんだからね、理性能力も必要だ。だけど、人間が理性に支配されたらいかん。理性を成長させ、理性を鍛えなければならんけども、それは使うためだ。使いこなすためだ。支配するためだ。われわれは理性の奴隷じゃなくって、人間が理性を奴隷化し、人間が理性を使いこなし、人間が理性を支配しなければならないんだ。理性を支配できる自分をつくらなければならないんだ。**

**とにかく基本的にいって、理性という能力は、人間の命の中の、またその肉体の中の、その中の頭脳という一部分に限定された能力が理性なんだ。ちっぽけなもんなんだ。決して理性は、これまで考えてきたようにですね、完全な能力ではない。神から与えられた能力ではない。理性は人間が後天的に自らつくった能力なんだ。だから、悟りとか、瞑想というのは、理屈を超えなければ、言葉を超えなければ、得られない。われわれが宇宙を感じたり、永遠の生命を感じたりするのは、命というかですね、感性を通してである。この理性を内に含んだ肉体こそね、宇宙への唯一の通路だ。宇宙を知ろうと思ったら、われわれは、そのわれわれの肉体そのものが宇宙なんだ。われわれは宇宙の中に存在してるんだ。肉体を知れば宇宙がわかる。肉体を通して宇宙とわれわれは一体になってですね、新陳代謝で結ばれて存在しておるんだ。肉体こそ宇宙への唯一の通路である。理性では宇宙はわからない。感性と肉体を通してしか宇宙を知ることはできない。理性で知った宇宙は偽物だ。人間がそう考えてるだけの話で、人間的な認識能力の限界内部でしか宇宙はわからない。だから、肉体と感性を通せば、初めて宇宙がなんたるかをわれわれは直接的に感じることができる。なぜなら、われわれが宇宙だからだ。われわれは宇宙の中に入ってるんだ。われわれは宇宙の一部分なんだ。だから、われわれ小宇宙という。それを理性で知ろうと思ったら、人間的な認識能力の限界内でしか、宇宙はわからない。科学では宇宙はわからないんだ。宇宙は感じるしかない。肉体という、この宇宙の一部分を通してしかですね、われわれは宇宙を知ることはできない。**

**とにかく、命は理屈を超えてるんだ。だから、理性で命を見ればですよ、この素晴らしく合理的にできておることっちゅうて、理性は命に感動するわけですからね。感動するのは感性ですけども、とにかくは理性から命を見れば、神秘に見えるわけですよ。信じられないほど素晴らしい合理性があるというわけですけど、それが理屈を超えた命の姿なんですよね。だから、命は理屈を超えてるんだ。命である人間は、だから、理屈を超えてるんだ。だから、人間は理性よりも素晴らしいんだ。人間は理性よりも素晴らしいんだ。理性の奴隷になったらいかん。理性的に考えて正しいことをしておったらいかんのですよ。そんなちっぽけな人間になったらいかん。理性的に考えて正しいと思うことをすれば、理性の奴隷なんだ。人間じゃなくなってしまう。われわれは人間的に考えて正しいことをせんないかんので、理性的に考えて正しいことをすれば理性の奴隷だ。人間的に考えて正しいことをするっちゅうことは、理性を手段能力に使って生きることなんだ。理性的に考えて正しいことをしようと思ったら、考え方の違いで殺し合うことになるんだ。理性的に考えて正しいことをしようと思ったら、人間は考え方の違いで殺し合うんですよ。**

**だから、人間的に考えて正しいことをしようと思ったらどうなるか。人間的に考えて正しいことをするとは、考え方が違う人とどうしたら一緒に仲よく生きていけるかな。それを考えるために理性を使う。それが人間的に考えるっちゅうことなんですよ。性格が違う人と、考え方が違う人と、宗教が違う人と、どうしたら一緒に仲よくなっていけるんやろう。こうしてみたらどうやろう、ああしてみたらどうやろうと、理性を使って考える。これが理性を手段能力に使って考えながら、人間的に生きるという方法であって、ああしてみたらどうやろう、こうしてみたらどうやろうっちゅうことによって、よりよく生きる力がだんだん芽生えてくる。これが人間的に正しいっちゅうことなんですよ。そういう状態というのは、人間が理性を手段能力に使って、人間が理性を支配して生きてるっちゅうことですよ。**

**両親と自分と考え方が違う場合、どうしたら、お父さん、お母さんに俺の考えをわかってもらえるやろう。それが愛なんだ。それが正しいっちゅうことなんだ。それが人間的に正しいっちゅうことなんだ。お父さん、お母さんに結婚を反対されたり、お父さん、お母さんに自分の今やってる仕事に対して、そのいろいろ文句を言われたり、そのときにむかついておったらいかん。どうしたらお父さん、お母さんに、自分のこの生き方を、自分のこの恋愛を、自分のこの結婚を認めてもらえるやろう。どう言ったらええやろう。どうしたらわかってもらえるやろう。その気持ちが愛なんだ。その気持ちが人間なんだ。その気持ちの中に血の通った、温かな心があるんだ。むかついておったら、もう温かさは消えてしまう。それは理性だから。冷たくなってしまう。考え方が違ってむかついておったら、それは理性だ。むかつくというのは理性の奴隷になった人間のすることだ。愛はない。そこには愛はない。もう血が通っていない。冷酷漢だ。だからむかついたら、うっかりしたら殺してしまう。殺せるんだ。理性になれば殺せるんですよ、人間は。戦争がそうですから。憎たらしい、むかつく。殺せるんですよ。**

**だけど、人間だったら殺せないんだ。人間が理性を支配すれば殺せないんだ。どうしたらわかってもらえるやろう。どうしたら一緒にやっていけるやろう。それが人間だからだ。それが人間的な理性であり、そういう人間的な理性を使うと愛が生まれてくる。心が生まれてくる。社会性が成長していく。ここはものすごくですね、これからの時代をですね、生きるうえで大事な基本原理なんですよ。今の人類の愛は偽物だ。理性は人間を支配する能力ではない。人間が理性を支配しなければならない。人間は理性よりも素晴らしい存在だ。われわれは理性を手段能力に使って生きなければならない。理性の奴隷になってはいかん。理屈によってつくり出されてくる問題は、愛によってしか乗り越えられない。愛こそ理屈を超える力だ。だから、これからわれわれは、愛の力を成長させなければならない。もう理性をこれ以上磨いて理性的に生きようとしたら、自分自身が不幸になってしまう。離婚の激増は止まらない。幼児の虐待はなくならない。戦争もなくならない。**

**だから、今、日本の子どもたちはどうなってるか。勉強しなくなった。もう理性を磨くことをやめたんだ。どんどん、どんどん、学校から去ってしまっておる。これは子どもたちの命が理性教育の危険性を察知したからである。いっとき、日本の子どもたちは、学力において世界一だった。だけど、いまや19番目だ。大人はそのことをなんと情けない。何しとるんやっちゅうて嘆いておる。それは大人たちが理性の奴隷だからだ。子どもたちは、もうすでに、これ以上、理性を成長させたら大変なことになってしまうということを子どもたちの命が感じて、そして、学校に行くことをやめてしまったんだ。そして、勉強することをやめてしまったんだ。子どもたちの命のほうが、より正しく現実を理解し、より正しい歴史のこの要請に応じた生き方をですね、し始めてる。大人たちのほうが、子どもに勉強させようと思ってること自体が、もうすでに時代遅れになってしまっておる。だからといって、べつに理性はどうでもいいわけじゃない。理性を手段能力に使って人間が生きていこうと思ったら、やっぱり理性能力は成長させなければならない。だけど、１足す１は２だという理性能力じゃない。考え方が違う人と、どうしたら一緒に生きていけるかっちゅうことを考え出すような理性能力をこれからつくっていかなければならないんだ。**

**理性能力っちゅったって、その理性の能力の質が違う、全然。とにかく、理性によってつくり出された問題は愛によってしか乗り越えられない。愛は理屈を超える力だ。愛は感情じゃない。情緒じゃない。もちろん、そういう面もあるけど、愛の本質は力だ。能力なんだ。命の能力なんだ。理性と同じ能力なんだ。だから、これからわれわれは、愛を能力として成長させていくという、そういうこの生き方をしなければなりません。どうしたら愛を能力として成長させることができるのか。それが後半の課題なんですけども、ここでちょうど半分時間たちましたので、10分間休憩を入れて、次また後半の話に入っていきたいと思います。どうもありがとうございました。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、今日の後半の話に入りたいと思います。先ほど、愛というものをですね、理性と同じように能力として考えて、それをこの理性に勝る問題解決能力を持った、そういうこの力に成長させなければならない。そういうことをお話したんですけども、残念ながら、今日までですね、人類は愛というものを能力として考えたことはない。愛は情緒、感情とばかり考えてきてですね、愛を理性と同じように何かしら問題を解決することができるような能力として考えて、しかも、その愛というものを、年齢が成長するにしたがって、愛の力がどんどん成長していって、愛の力が増していくというふうな、そういう教育システムというものをまだ人類は誰もつくったことがないんですね。その意味では、愛というものはまだまだですね、今日の状況においても、自然発生的な状況のままで愛は放置されておって、まだ愛は文化となっていない。そういうふうにこの言わなければならない。**

**ということは、古代人がですね、愛について悩んでおったと同じ問題で現代人も愛について悩んでおる。これは愛というものは、まだ自然の状態で、自然発生的な状態で放置されておる。また、人類の努力の対象に1回もなったことがない。そのことを意味するわけですね。古代人でも、やっぱり男女の愛の問題で悩んでたし、嫁しゅうとめの問題で悩んでおったし、親子の問題で悩んでおった。同じように現代人も、嫁しゅうとめの問題で悩み、男女の恋愛の問題で悩み、親子の問題で悩んでおる。そこにはまったくなんの成長の跡もない。これはまだ愛というものが文化としてですね、この考えられたことがない。愛を能力として成長させようという意図を持ったことがない。そのことを、意味してるわけですね。で、なぜそうだったのか。それは、愛というものは理屈を超える力だ。理屈抜きの力だ。そういうふうにこう言われておった結果ですね、愛はまだ1回も学問の対象になったことがない。愛はもっぱら文学の対象であって、学問として愛は研究されたことがない。で、文学の中ではですね、さまざまな愛のバリエーションが描かれて、もう愛については語り尽くされただろうというふうにですね、思われるぐらい、愛についてはもういろんなことが文学の中で描き尽くされたように見える。だけども、まだ愛というものは、学問の対象として、愛を成長させるというふうな努力をまだ人類はやったことがない。**

**愛そのものの素晴らしさはですね、人類は古くから知っておった。これはもう仏教でも慈悲心というふうにいわれてですね、愛を重要視してるし、また儒教でも仁という言葉でですね、愛を語っておるし、またキリスト教でも、アガペーですね、あっかんべえじゃなくてですね、アガペーといってですね、愛の重要性というものを語るということはしておるんですけども、まだ1回もですね、人間としての愛というものを成長させていく。それを発展させていく。そういうふうな意図を持ってですね、愛について考えるということはされたことがありません。心理学でも愛を問題にします。だけど、心理学で愛を問題にするのは、やはり愛のバリエーションをですね、さまざまに描くだけであって、そこに発展、成長という意図がないわけですね。その意味で、これからわれわれは、年齢が成長するにしたがって、学年が進むにしたがって、愛の力がどんどんと増していく。そういうこの教育システムをつくることによってですね、この学校からいじめをなくし、また成長するにしたがってですね、年を重ねるごとに、より素晴らしい愛に生きることができる。そういう人類をつくっていかなければなりません。**

**そのためには、いったいどういう努力をしたらよいのか。それがこの、これからの課題になってくるわけですね。そんな意味で、今日だけじゃなくって、次回も、またその次も、またその次も、愛についてずっとお話をしてですね、どうすればこの愛の力を成長させていくことによって素晴らしい会社ができるのか。どうすれば愛の力を成長させていくことによって、素晴らしい人間関係をつくることができるのか。どうすれば愛の力を成長させていくことによって、自分が幸せになり、子どもを幸せにし、また相手をも幸せにして、素晴らしい家庭がつくれるのか。そのことをですね、これから順次、お話をしていくわけなんですけども、とにかく今日は、その土台となる、ベースとなるですね、ベースとなる基本的な考え方だけを、お話をして、今日の話の内容にしたいと思ってるんですけども、とにかくはですね、どうすれば愛というものを理性に勝る問題解決能力を持った実力として成長させていくことができるのか。愛を学問の対象としてですね、考えていくっちゅうことはいったいどういうことなのか。そのことを今日はですね、お話をしたいと思います。**

**で、この愛というものを学問的に考えていくっちゅうことは、いったいどういうことなのか。それは学問というものは、どんなことを考える場合でもですね、時間、空間という枠組みをこの基本的に大事にする。それを使います。で、なぜ時間、空間というこの枠組みを使うのか。それは、あらゆる現象、あらゆる出来事は、あるとき、あるところでというですね、時間、空間という、そういう枠組みの中であらゆる現象が起こる。その意味で、時間、空間という枠組みを基本的に用いることによって、このあらゆる現象を偏りのない、全体的な視野で捉えるということができる。そのことのために学問は時間、空間という、この構造を使って物事を考えていくっちゅうことをする。それは偏りのない、全体的な物事の捉え方というものを重要視する学問であるから、そういう方法を用いるんですね。**

**これは、この会社に起こってくる問題なんかでもですね、現状分析だけでその問題に対応しようとするんじゃなくって、その問題がなぜ起こったのか。その歴史的考察、時間的なですね、流れからして、なぜそういう問題が起こったのか。この現状分析と歴史的考察というものをドッキングさせることによってですね、その交わるところができる。その交わるところに、その問題の本質がある。ここを突けば、この問題を乗り越えられるというポイントがわかるわけですね。一個の人間を理解する場合でもですね、学問的に一個の人間を理解しようと思ったならば、その人間は現在どういう仕事をしておって、どういう性格で、どういう友達がいて、どういう環境の中でこの生活してるか。その人の現在を知っただけでは、その人を本当にわかったとは言えない。本当にその人をちゃんとこう知ろうと思ったならばですね、その人が生まれてから今日まで、どういうこの環境の中で、どういう出会いをもって、どういう事件と出合って、どういうふうに成長してきたか。その人のこの生まれてから今日までの個人史、個人の歴史ですね。個人史と、そして今どうかという現状分析、それをこの、ね、『ガッチャマン』と申しましょうかですね、それを組み合わせることによってね、その交差点、交点ができる。その交点にその人の本質があるというこう、見方をすることができるわけですね。これが学問的に一個の人間を知る方法であります。**

**そのことによって、物事の実態というものが明確になってくるし、また問題の本質が明らかになってくる。これが学問的方法であります。その意味でですね、愛について語る場合にもですね、愛におけるこの空間的本質とはなんなのか。愛における時間論的な本質とはなんなのか。愛における空間論的な本質はなんなのか。愛における時間論的本質はなんなのか。そういうふうなこの体系でですね、愛について語っていくことによって、愛というものを学問的に捉え、また愛の本質を明確に理解するということができてくることになるわけですね。愛というものには、この空間論的な現れ方と時間論的な現れ方がある。そこでまず愛における空間論的な本質とはなんなのかっちゅうところから、お話をしていきたいと思いますけども、愛というものを空間論的に捉えるとはどういうことなのか。で、愛というものは基本的に人間と人間を結び付ける力である。だけど、愛は最も普遍的に考えるならばですね、単に人間と人間を結び付けるだけじゃなくって、愛国心もあり、民族愛もあり、職業愛もあり、ペットを愛することもある。その意味では、愛というものは原理的に言えば、人間と万物を結合する力である。人間と宇宙を結合する力である。そういうふうにも言えるんですけども、だけど、一応、人間社会の中に限定して考えるならばですね、愛は人間と人間を結び付ける力。すなわち、人間関係の力である。愛は人間関係の力であるというふうに言わなければならない。**

**じゃあ、人間関係とはなんなのか。人間関係の相対が社会である。だから、社会とはなんなのかということを考えることによって、愛における空間論的本質が見えてくる。これがですね、学問的に愛を考える、しかも空間論的に愛の本質を見極めようとする道筋であります。で、学問というものはですね、大事なところは、誰も絶対に異論を差し挟む余地がない。誰も絶対に反対できん。誰も絶対にこの批判できない。誰もがこの異論を差し挟む余地がないような、そういう原理を積み重ねていかないとですね、学問にはならないんですね。ちょっとでもこの異論を差し挟む余地があったり、ちょっとでも批判されるようなところがあったなら、もうそれは学問ではないし、また批判される余地が多ければ多いほど、その考え方は学問性が薄いということになってきてしまいます。その意味で、学問的に物事を語るためには、誰も絶対に批判できない、反対できない、この対論の余地がないというね、そういう原理を積み重ねていかなければならないんですよね。だから、愛について考える場合でも同様であります。だから、空間論的に愛を考えるという、その土台はなんなのか。誰も絶対に反対できないっちゅうことは、いったいどういうことなのかといったら、愛というものは人間と人間を結び付ける力である。男女の愛も、親子の愛も、兄弟の愛もね、この師弟愛も、すべてこれは人間と人間を結び付ける力として愛が働いてるっちゅうことを意味するわけですね。愛は人間と人間を結び付ける力である。人間と人間を結び付ける力であるっちゅうことは、人間関係の力である。そして、その人間関係の総体が社会だ。これは誰も反対することのできない考え方の道筋であります。**

**そこで、じゃあ、社会とはなんなのか。社会とはなんなのかということを知ることによって、愛の本質が見えてくる。愛の空間論的な本質が見えてくる。そういうことになるわけですね。じゃあ、社会とはなんなのか。社会には自分とは違う性格の人がいる。これも誰も反対できませんよね。おるんですから、おらんとは言わせませんからね。おるんですから。社会には自分とは違う性格の人がおる。社会には自分とは違う感じ方の人がおる。自分とは違う考え方の人もおる。自分とは違う職業の人もおる。自分とは違う立場の人もおる。自分とは違う宗教の人もおる。自分とは違う文化を持った人もおる。それが社会の現実であります。そして、社会の中で生きるということはどういうことなのか。社会の中で生きるということは、自分とは違う性格や、自分とは違う考えや、自分とは違う職業や、自分とは違う宗教の人と共に生きる。それが社会の中で生きるっちゅうことの現実であります。で、その社会の中で要求される社会性とはなんなのか。社会性とは、自分とは違う性格の人と共に仲よく生きる力のことを社会性というのである。自分と違う性格の人と共に仲よく生きていけないということは、社会性がないと言われるんだ。ということは、社会性があるということは、自分とは違う性格の人と共に仲よく生きることができるということを社会性があるというんだ。**

**自分とは違う職業の人と共に仲よく生きることができる。自分とは違う宗教の人と共に仲よく生きることができる。自分とは違う考え方の人と共に仲よく生きることができる。自分とは違う価値観の人と共に仲よく仕事ができる。その状態が社会性があるということになってくる。ということは、宗教戦争をしてる人は、社会性がないんだ。で、人間が社会的存在であるとするならば、人間が社会的存在であるとするならば、社会性がないっちゅうことは人間性がないんだ。人間性がないっちゅうことは、人間じゃないんだ。人間じゃないから、人が殺せるんだ。そういう理屈になってくるわけですよね。だから、国連で、社会とはなんなんでしょうねっちゅうことを話し合ってもらったらね、恥ずかしくて戦争なんかしてられなくなってしまう。宗教戦争をしてるっちゅうことは、俺たちは人間じゃなかったんだということになりますからね。それだけでもね、もう戦争の抑止力になりますよ。これは国連のですね、そのユネスコのユネスコ憲章というね、このものがあるわけですけど、ユネスコっちゅうのは、平和の機関、平和を実現するためにユネスコがつくった機関ですけども、このユネスコのユネスコ憲章の書き出しの言葉がですね、どういう言葉から始まってるかっちゅったら、「戦争は人間の心の中から始まるのである。だから、人間の心の中に平和の砦を築かなければならない。」これがユネスコ憲章の書き出しの言葉です。**

**で、ユネスコ憲章というのは、この1945年、第二次世界大戦が終わってですね、そして、全世界の代表者が集まって、もう二度とこんな悲惨な、悲しい、野蛮なこの人間同士が殺し合うなんていうような戦争は、もう二度とないようにしなきゃならん。どうしたらいいんだろうっちゅうことを話し合ってね、その結果としてできたのがユネスコであります。で、そのユネスコの憲章の書き出しの言葉がこの言葉なの。「戦争は人間の心の中から始まるのである。だから、人間の心の中に平和の砦を築かなければならない。」じゃあ、その平和の砦とはなんなのか。人間、心の中に平和の砦を築くっちゅうことは、この戦争ができなくなるような、意識的な、精神的な原理をつくらんないかんといってるわけですよね。心の中に平和の砦を築く。じゃあ、その心の中に築く平和の砦とはなんなのか。それはまず、この社会とはなんなのかっちゅうことをちゃんと自覚することでしょうね。社会とはなんなのか。社会とは、自分とは違う宗教の人と共に仲よく生きていく。それが要求されるところだ。**

**社会性というのは、自分とは違う宗教の人と共に仲よく生きる力のことなんだ。自分とは違う性格や、自分とは違う宗教の人と共に仲よく生きられんっちゅうことは、社会性がないんだ。人間が社会的存在であるとするならば、社会性がないっちゅうことは、人間性がないんだ。人間性がないっちゅうことは、人間じゃないんだ。だから、人が殺せるんだ。ということは、心の中に築かなければならない平和の砦というものの1つはね、社会というのは、この自分とは違う性格の人と共に生きていかなければならないところだ。自分とは違う宗教の人と共に生きていかなければならないところだ。そして、そこで要求される社会性というのは、自分とは違う性格や、自分とは違う宗教の人と共に仲よく生きる力のことを社会性というんだ。そして、人間が社会的存在であるとするならば、この社会性がないっちゅうことは人間性がないんだ。人間性がないっちゅうことは、人間じゃないんだ。そのことをちゃんと知るということがですね、まず心の中につくらなければならない平和の砦の1つだというふうにですね、考えなければならない。**

**それほどにですね、この社会とはなんなのかっちゅうことから出てくる愛の空間論的な原理は、ものすごく重要な課題です。で、空間論的に考えるならばですね、愛というのはいったいなんなのか。それは、愛というのは、性格が違う人と共に仲よく生きる力なんだ。考え方や宗教の違う人と共に仲よく生きる力なんだ。それが愛だ。それができないっちゅうことは、愛がないんだ。社会性がないんだ。人間じゃないんだ。そういうふうにですね、言わなければならない。さらにそのことを学問的に根拠付けようと思ったら、人間は社会的存在であるということをまたちゃんと学問的に根拠付けなければならない。なぜ人間は社会的存在といえるのか。そこにもまたですね、時間論的、空間論的な根拠があるわけなんですよ。人間が社会的存在であるっちゅうことに対するですね、この空間論的な根拠とはなんなのか。それは、この人間は人間の子どもに生まれてきてもですね、人間は人間の子どもに生まれてきても、人間の社会の中で、人間の手によって育てられなかったら、人間にはならん。すなわち、人間は人間の子どもに生まれてきてもですね、このオオカミの社会の中で育てられると、『狼少年ケン』になってしまうと。猫に育てられちゃったら、「猫少年ニャン」になっちゃうかもしらんというね、そういう可能性がある。で、人間は人間の子どもに生まれてきても、人間の社会の中で、人間の手によって育てられないと人間にはなれない。だから、社会的存在だ。これが空間論的なこの人間は社会的存在であるっちゅうことに対する根拠なんですよ。**

**で、時間論的な根拠とはなんなのか。それは、今、自分がここに存在する、今、自分がここに生きておるっちゅうことは、その前に２人の人間がおったということを証明してる。自分の前に２人の人間がいなければ、自分は存在できない。生まれてこなかった。２人の人間って、お父さん、お母さんだ。だけど、お父さん、お母さんというのは、元からお父さん、お母さんじゃなくて、元は他人だった。元は他人であった男と女が結婚して、一緒になって、そして、自分を生んでくれた。そのことによって、自分がここに存在するんだ。だから、自分が存在するっちゅうことは、その前に２人の人間がおったっちゅうことを証明してるんだ。ということを考えればですね、自分という人間は、３人の人間の存在を証明してる。３人の人間が存在するということをですね、証明してる。そういう存在だというふうに言うことができる。で、この３人の人間とは社会である。２人では社会じゃない。２人は個人的な関係だ。３人の人間は社会の最小単位なんですね。なぜかといったら、社会というのは、１人称、２人称、３人称という、そういうこの意識がですね、社会というものを構成する。社会というのは、この３つの視点をもって成り立ってる、そういう空間なんですよね。１人称、２人称という関係は個人的関係だ。第三者がいて、初めて社会という意識が生まれてくる。１人称、２人称、３人称、３つの立場が総合されてですね、初めて社会、現実というものがこう認識されるんですね。だから、本当にね、現実というものをちゃんと捉えようと思ったらですね、３つの目を総合しなければならない。すなわち、本当の現実というのは、自分がこうだと思ったのは、まだ３分の１。また相手がどう思ってるかっちゅうことをこの加えても、まだ３分の２。第三者がそれをどう見てるかという、この自分の考えと相手の考えと、第三者の考えを統合してですね、初めて現実とはなんなのかっちゅうことがですね、学問的にちゃんと捉えられる。これが、この現実を正しく捉える方法論なんですよね。３つの目を総合しないと、本当の現実はわからない。その意味で、社会というのは、３人の人間がその最小単位だというふうにですね、言うことができる。**

**その意味で、自分がここに存在するっちゅうことは、３人の人間の存在を証明してるんだから、われわれは社会を背負ってるんだと。その一人一人が社会を背負ってるんだ。だから、人間、みんな社会的存在だというふうに言わなければならない。これがこの人間は社会的存在であるということに対する学問的な、時間論的根拠なんですね。そういうふうにこう、人間は社会的存在であるということを言うためにもですね、その学問的には時間、空間という、そういう枠組みを使わんといかんわけなんですよ。で、その枠組みを使えば、なぜ人間は社会的存在と言わなきゃならんのかという根拠がですね、明確になってくる。人間は社会の中で、人間の社会の中で育てられないと人間になれない。また、人間は３人の人間の実存を背負っておる。この両方のですね、この根拠において、人間は社会的存在と言える。だから、人間について考える場合に、社会とはなんなのかっちゅうことを考えることは、避け難い、重要なこの関係性がある。社会とはなんなのか。社会とは、自分とは違う性格や、自分とは違う宗教や、自分とは違う考え方の人と共に生きていかなければならない世界、それが社会だ。社会性というのは、自分と違う性格や、自分と違う宗教や、自分とは違う考え方の人と共に仲よく生きる力が社会性なんだ。それができない人は、社会性がないんだ。そして、人間は社会的存在であるとするならば、社会性がないっちゅうことは、人間性がないんだ。人間性がないっちゅうことは、人間じゃないんだ。だから、人が殺せるんだ。それが戦争の原因だというふうにね、言ってしまえる。**

**だから、戦争をなくさせようと思ったらですね、国連で、あるいは家庭の中で、職場の中で、社会とはなんなんでしょうねと、みんなで考えたらいい。社会とはなんなのか、はっきりわかれば、誰もけんかできなくなってしまう。誰も殺し合えなくなってしまう。対立することが恥ずかしくなってしまう。どうしたら仲よくやっていけるでしょうねって考え始める。そこから人間が始まるんだ。そこから人間性が生まれてくるんだ。そこから心が生まれてくるんだ。そして、そこに愛があるんだ。愛とはそういう力だ。それが愛は社会を生き抜く力であるというふうにですね、言われることになってくる根拠であります。愛は社会を生き抜く力である。そういうふうに考えればね、空間論的な愛の本質はなんなのか。空間論的に言えば、愛とは他者と共に生きる力である。愛は決してこの恋愛沙汰の甘ったるい、単純な世界ではない。愛はまさに厳しい努力の世界だ。愛は命懸けの努力の世界だ。人間の幸せを懸けた命懸けの努力の世界だ。愛の実態は努力なんだ。相手のために努力できるっちゅうことは愛がある。相手のために努力しなくなったら、そこに愛はないんだ。愛の実態は努力だ。努力できるかどうか、そこに愛があるかどうかの判別がつく。相手のために努力する気持ちがなくなったら、もう愛は消えたんだ。相手のために努力できてる限り、愛は存在するんだ。そして、愛の感動は、相手のために自己犠牲的な努力を払いながらも、その自己犠牲を喜びとするところに愛の感動がある。愛の真実がある。そういうふうにこの言うことができる。**

**相手のために自己犠牲的努力を払って、自己犠牲だと思ったら、もうそこには本当の相手に対する愛はない。その相手のために自己犠牲的な努力を払う、そのことが自分にとってうれしい。それが幸せだと思う。そこに愛の喜び、感動、愛の素晴らしさがあるわけですよね。だから、恋愛すると、だいたい男の子は、女の子の周りをちょろちょろ、ちょろちょろしながらですね、その女の子のためにいっぱい自己犠牲的な努力を払ってですね、いろんなこのサービスをする。で、そのことをしてる男の子もうれしいし、幸せで、喜びなんですよね。それがつらいと思ったら、もうその男の子は、その相手の女の子に対する愛は相当減ってしまったとこう言わなければならない。どんだけ相手のために努力しても、つらいことをしても、それが自分にとってうれしいと思ってる限りは、そこには愛がある。それがつらくなり始めたら、もうだんだん愛はしぼみ始めてきたんだ。親の子どもに対する愛というのはですね、お父さん、お母さんが自分の子どもためにどれほどの自己犠牲的努力を払って、この子どもに関わったか。それがその親の子どもに対する愛の実証ですからね。とにかく愛の本質は努力なんだ。だから、本当の愛というのは苦しいもんなんだ。つらいもんなんだ。だが、そこに喜びがある。それがまた愛なんだ。**

**相手のために苦しい努力をする、そこに喜びを感じてるのが愛だ。そこにまた愛の素晴らしさがある。理性的に考えたら、そんなことやってられるかっちゅうことになってくるんですよね。それをやってしまうのが理性なんですよね。あ、いや、それをやってしまうのが愛なんですよね。理性的に考えたら、こんなばかばかしいことやってられるかっちゅうことになってくるんだけど、それをできるところにまた愛の素晴らしさがある。それが理屈を超える愛の世界ですね。デートなんかでも、約束をする時間に女の子が来なくっても、何時間も待っとったりなんかしてね、理屈で考えたらもう待ってられるかということになって帰ってしまうんですけど、来るまで待っとると。理屈抜きにこの待つということができてしまってるというね、そこにこの理屈を超えた愛の力というかですね、そういうこの信じて待つという、理屈を超える力が生まれてくるわけですね。普通ならもう３時間ぐらい待っとったら、もう帰ってしまうんですよね。女の子は、まだ待っとるかな、待ってへんやろうな、もう待ってへんやろうなと思って見に来たりなんかするわけですよね。で、おらんかったら、やっぱりなで、そこで終わってしまうんですけど、待っとったら感動もんですよね。うわ、おったということになってしまってですね、ジーンときてしまったりなんかして、で、飛び付いて、抱き付いちゃったりなんかしちゃったりなんかして、で、そういうことでですね、来るまで待っとるという、その愛の力がですね、普通はものにできない女をものにするというふうな、そういうこの結果になってくるわけですよね。**

**理屈で考えたら、とってもやってられないことをやったとき、感動が生まれてくる。理屈を超えるからね。そういうこのこともね、愛の実証であります。とにかく、この理屈を超える力が愛だ。愛は努力なんだ。ばかになって努力をする。普通なら、理性では考えられないような努力をする。それがまた愛の力ですよね。だから、考え方が違う人と、どうしたら一緒にやっていけるやろう。これが愛の努力なんですよ。理屈で考えたら、考え方が違ったら、一緒にやっていけるはずはない。これは理屈なんだ。そやけど、そこのところをどうしたらやっていけるやろうと思うから、理屈を超えるわけですよね。そこに理屈を超える、理性を超える愛の力が芽生えてくる。そして、愛に感動して、そんなに私と一緒にやっていきたいんかと、こういうことでね、で、その愛に感動して、また相手も理屈を超えてくれて、そして、一緒にやっていけるという、そういうこの力がこう芽生えてくるわけですね。**

**とにかく空間論的な観点から言えば、愛とは他者と共に生きる力である。愛とは他者と共に生きる力である。性格が違い、考え方が違い、宗教が違う。それは他者というわけですよね。自分とは違う他者、他人。愛とは他者と共に生きる力である。自分と同じ考え方の人間とだけ生きていったらいいんやと、愛はいらん。もう理性だけで十分や。そやけども、現実はそういうわけにはいかんのだ。商売をし始めれば、宗教の違う人とも関わらんないかん。考え方や感じ方が違う人とも関わらないかん。いろんな人と関わらないかん。自分と気の合う仲間と付き合っておったらええんで、気の合わんやつは無理に付き合わんでもええわ。そんなこと言っとったら、商売は成り立たない。どんどん、どんどん、縮小してしまう。会社は発展しない。だから、職場は愛の実践だ。仕事も愛の実践だ。会社内でも性格が違い、感じ方が違い、立場が違い、いろんな人がおる。どうしたら一緒にやっていけるやろう。どうしたら協力してやっていけるやろう。それを考え始めたとき、そこに愛が芽生えてくる、愛が始まる、愛が育ち始める。それが心をつくる方法論だ。そのことによって、人間性、温かな血の通った心がそこから湧き出てくるわけだ。同じ考え方の人間とばっかり一緒にやっとって、考え方が違う人間を排除しよったら、そこには温かな血の通った心遣いなんていうのは出てこない。同じ考え方や同じ立場の人間とやっていくんやったら、そりゃもう理性だけで十分やっていける。画一性だからね。理性だけで十分やっていける。愛はいらん。その世界に愛はいらん。だけど、現実はそういうわけにいかん。現実には、もう本当に、細かいことから言えば、みんな違うんですからね。どうしたら一緒にやっていけるやろうなと思うところから、心が生まれてきて、人間性が成長して、愛がだんだん育ってくる。それが愛に生きるということなんですよね。それが愛に生きる人間の姿だ。**

**じゃあ、いったいどうしたら考え方が違う人と一緒にやっていけるのか。それをまた考えないかん。考え方が違う人、価値観の違う人とどうしたら一緒に仕事ができるのか。そのためには、ただ考え方が違う人と一緒にやっていこうっちゅうようなことを思ってるだけでは、これは絶対できない。方法論がちゃんとですね、理性で考え出されなければならない。その方法論を考えることが愛なんだ。愛は理性によって育っていくんだ。理性を使わなければ、愛は育たないんだ。だから、われわれは真実の愛に近づいていこう、素晴らしい愛を持とうと思ったら、理性を磨かないとね、愛は実現できません。どうしたら考え方が違う人と一緒にやっていけるのか。こうしてみたらどうだろう、ああしてみたらどうだろう。どんどん、どんどん、よりよい考え方、よりよいやり方を考え出していく。そういう理性の力がなかったならばですね、愛は成長していかない。**

**じゃあ、具体的にどうするのかといったらですね、基本的には、同じ考え方の人間と付き合っておったら、人間は成長しない。なんで成長せんないかんねん。それは命は進化してるんだ。命は成長を願ってるんだ。命というのは、常によりよい状態になることを願ってるんだ。だから、おぎゃあと生まれたら、だんだん成長するんだ。命そのものが成長を願ってるんだ。ちょっとでも金が欲しい。物においても成長を願ってるんだ。命が成長したいだけじゃない。命が成長したいっちゅうことは、物質的にも成長したい。精神的にも成長したい。心においても成長したい。基本的には成長を願ってるんだ。もっと幸せになりたいんだ。もっとよく知りたいんだ。もっといろんなことがよくできるようになりたいんだ。もっともっとというのが、命の原理的な生き方である。人間はもっともっと成長したいんだ。そのためにはですね、同じ考え方の人間と付き合っとったら、そこで止まってしまう、成長が止まってしまう。成長しない。成長しようと思ったらどうするか。だから、成長するためには、自分にないものを持ってる人と出会って、自分にないものを相手から学んで、そして自分が相手から学んだものをですね、自分の中に取り込んで、そして、それをこの取り込んだ結果、自分の考えを成長させていく。自分の考えを厳密化していく。自分の人間性をより鍛えていく。また自分の人間性の幅をつくっていく。そういうふうにして初めて人間は成長するということが実現されるわけですね。**

**成長するためには、自分とは違う考え方や、自分とは違う感じ方や、自分とは違う宗教や、自分とは違う価値観や、自分とは違う立場や、自分とは違う人間性の人と出会って、そして、相手から何かを学んで、自分を成長させていく。そういうこの理性の使い方をしないとね、人間はこの成長することはない。だけど、そういうふうにして相手から学ぶことが愛なんだ。相手から学ぼうとしないことは愛がないんだ。愛するとは学ぶことなんだ。これも空間論的なですね、愛の本質の展開として、２次的に生まれてくる愛の原理です。愛するとは学ぶことである。だから、子どもを育てようと思ったら、子どもから学ばなければならない。赤ちゃんが泣いたら、なんで泣いてんやろうなっちゅうことをお母さんは知らんといかん。赤ちゃんから学ばないとね、子どもは育てられません。泣き方によって、ちょっとした身の動かし方によって、何をしてほしいんやろう。そうやって学びながら親は成長するわけであります。**

**相手から学ぼうとすることが愛だ。相手から学ぼうとしないということは、相手を拒否してるのであって、そこには愛は存在しない。愛するとは学ぶことである。だけども、中には、こんなやつからなんにも学ぶものなんかないわと思う人もおるんですよね。その場合はどうするか。その場合は、こんなやつもおって人間なんや。いわゆる人間とは、いろんな人がおる。この人もおって人間なんや。実際問題、人間といってもね、精神の病にかかった人たちもおる。あるいは、身体の不自由な人もおる。いろんな人がおる。それもみんな人間なんですよね。そういう人たちと共に生きていく力をつくっていかなかったら、人間の社会の中で生きていく力を成長させることはできません。だから、もう遅刻はするわ、うそを言うわ、仕事をせえへんわ、もうなんちゅうやつやというのはね、そういう人もおって人間なんだ。そのときどうするか。それを排除してしまっておったら、そこがその人の人間の限界になってくる。それをも取り込んで、どう自分を成長させていくか。そのためには、そういう人とどういうふうに付き合ったらいいのか。どういうふうに付き合ってあげたら、その人が仕事をしてくれて、うそを言わんようになって、遅刻をせんようになってくるのか。そのことを考えないかん。**

**すなわち、その人から何かを学んで自分を成長させるっちゅうことができなかったならば、こういうやつもおって人間なんや。人間とはこういうもんなんやと。そのことをまず知ってですね、そういう人と一緒に生きていこうと思ったら、どういうことをしたらよいのかということを考えながら、自分の人間性の幅をつくっていく。自分の命から出す波動の幅を広げていく。いろんな人と波長が合うようになる。そういうふうな自分に、人間性の幅をつくる、人間性の豊かさをつくる、心の豊かさをつくる。これは人間の波動の幅を広げることなんですよ。いろんな人と波動が合ってくる。波動を合わすことができる。そういう仕方でですね、相手の存在を利用させてもらって、自分を成長させていく。おまえがおってくれたから、俺はこんなでかい人間になれた。ありがとうっちゅうてですね、うそを言って、仕事をせんわ、遅刻をするわという人に感謝する。それぐらいのですね、大きさができてきたら大したもんやと。具体的にどうするかといったらね、遅刻はするわ、うそを言うわね、そういう人たち、その人をまともにしようと思ったらね、その人を変えようと思ったらいかんのですよ。その人を育てようと思ったらいかんのですよ。その人の世界にこちらが飛び込まんないかんのですよ。**

**じゃあ、どういうことなのかといったら、その人が読んでる漫画の本を自分も買ってきて読むんですよ。その人が聞いてる音楽を自分も買ってきて聴くんですよ。その人が見てるドラマを自分も見てみるんですよ。その人がやっておることを自分もやってみるんですよ。暴走族なら、自分も暴走してみるんですよ。一緒に走ってみる、仲間に入れてもらって。そして、スカッとしたな、気持ちええなと言うたら、友達になれる。それを批判してる限りは、なんとかそいつを変えてやろうと思う限りは他人なんで、これは絶対に合わん。やっていけへん。その人が読んでる漫画を自分も買ってきて読んでみて、ここのところ、面白かったよねと、こちらから相手の世界に飛び込んで、相手と共通体験をつくる。相手と共同体験をする。体験こそ理屈を超える力なんですよ。共に相手の体験を自分もするんだ。その中で自分が共感できるものを相手にしゃべるんですよ。あそこ、よかったよね。あそこ、面白かったよね。あそこ、気持ちよかったよね。あそこ、素晴らしいよね。その人の世界を褒めるんですよ。すると、その人はですね、そのことによって、こちらに目を向けてくれる。そこからほかの人の言うことは聞かんでも、この人の言うことだけは聞くというふうに変わってくる。変えようとしたら、変わらん。だけど、こちらが相手の世界に飛び込んだら、共通体験、共同体験ができてきて、仲間になる。これが戦友というね、昔、鉄砲の弾の下を命懸けでくぐってきた仲間が一生の友達になる理由なんですね。共通体験、共同体験。相手を自分の世界に引きずり込む。**

**相手を育ててあげようと思ったら、これはもう絶対、駄目なんだ。自分から相手の世界に飛び込んでしまわんないかん。これは相当、難しいことや。だから、それをする愛がなかったならば、本当には人は育ってくれない。どうしようもない人がおった場合にはそういうことを、なんとかしようと思ったら、そういうことをせんないかん。体験こそ、理屈を超える力だ。病気にならんと、病気になった人の本当の気持ちはわからん。罪を犯さなければ、罪を犯した人間の本当の気持ちはわからん。どんなに本で読んでいっぱい知っておってもね、行ってみたらこうでしたっちゅったら、せやけどなとは言えませんからね。行ってみたらこうやったんやっちゅうたら、ああ、そうやったんと認める以外にない。体験は理屈に勝る力だ。体験こそ真実を語る力だ。体験なしでも真理は語れますよ。真理は観念だけでも、理性だけでも語れますけどね、体験がなかったら、真実は語れないですよ。本当のことはわからん、体験がなかったら。理性で、やっぱり勉強することはできますけど、それはね、観念の知識。真実じゃないんだ。やってみなければ真実はわからん。だから、議論をしてもね、おまえ、やってないやろう。俺、やったんや。やってないやつに何が言えるんやとこう言えますからね。もうそれで勝ちなんですよ。体験に勝るこの力はない。それが理屈を超えるんだ。だから、相手の世界に飛び込まんことにはね、相手は変わってくれない。**

**それが愛だ。相手の世界に飛び込む。この他者中心的な心の働きが愛なんだ。自分の世界に引きずり込んで、俺好みの相手をつくろうと思ったら、それは愛じゃないんだ。それは支配なんだ。画一化なんだ。だから、相手は変わってくれない。これは子どもの場合でも同じなんですよ。だから、昔、『積木くずし』というね、不良少女になってしまったね、これは実話で、芸能人のね、夫婦の子ども、女の子が不良少女になってしまった。で、もう歌舞伎役者みたいな化粧をしてね、で、その町を歩く。で、なんとかその子をちゃんとした人間にしようと思って、お父さん、お母さん、随分、苦労した。どうしても、その子をいい子にしようと思ったら、絶対に駄目。ますます悪くなってしまうんですよ。最終的にどうしたかといったら、お母さんがね、その自分の子どもと同じ化粧をしてね、一緒に歩いたんですよ。そしたら、その女の子が、そのお母さんにね、そんなみっともないことせんといてっちゅうてですね、恥ずかしいわっちゅうてですね、言い始めたんですよ。それで、その自分の化粧が結局そういうことなんやっちゅうことがわかってきてね、そっから、だんだん、だんだん、立ち直ってきた。で、お母さんがその子の世界に飛び込んだんですよ。で、一緒に歩きながら、わあわあ、うれしそうにというか、とにかくは、その子の世界に飛び込んで、同じ命を生きてる、同じ気分で生きてるという、そういうこの姿をその子に見せたのね。それはその子にとっては、ちょっとはお母さんがすごいことをしてくれたっていうんで、喜びだったんだけど、実際、お母さんの顔を見たら、えー、なんて顔なんっていうことになってきてですね、そのことで自分がわかり始めたんですね。そういうふうにして立ち直ってきた。**

**もうどんなに立派な心理学者やですね、先生に診せても、その子は治せなかった。ところが、お母さん、最後の手段でね、その女の子の世界に飛び込んで、その女の子にしてることと同じことをお母さんもし始めたの。で、ようやくその子は立ち直った。変えようとして、絶対に変わらん。もう命懸けでその子の世界に飛び込まないかん。なかなかこれは難しいっちゅうかね、仕事をしてるような状態では、なかなかそんなことはできませんけどね、本当にその人をなんとかしたいと思ったら、自分を捨てて、相手の世界に飛び込まないかんのですね。とにかくは、その人間の成長の仕方というのはですね、相手から学んで、自分をこのより成長させていくということもあるし、また、相手の世界に飛び込んで、自分の人間性の幅をつくっていく。そういう人とどうしたら付き合えるのかっちゅうことを考えてね、自分の人間性の幅をつくっていく。心の広さをつくっていく。心の豊かさをつくっていく。自分が出す波動の幅を広げていく。誰とでも波長が合う。そういう状態にですね、自分をしていく。両面、両方のですね、この時間的に成長していく。空間的に広がる。両方のですね、成長の仕方が人間にはある。**

**そういうふうにしてですね、いろんな人と関わりながら、自分をその両面のどちらかでね、成長させていくということをする必要がある。それが愛の力なんですよ。これ、両方とも愛なの。相手から学んで、自分の考えをより高度で、より厳密な考え方にしていってですね、君と出会えたから、俺はこんなに成長できた。ありがとう。うれしいと言って、その人に感謝をする。そういうこの愛の仕方もあるし、相手の世界に自分が飛び込んで、そして、その相手の世界を共通体験して、そして、その相手と波長を合わせて、そして、心のつながりをつくっていく。そういうこの愛の力もある。人生には両方の力が必要なんですよね。そのことを他者と共に生きる力というんですよ。他者と共に生きる力。空間論的な愛の本質は、この他者と共に生きる力をつくることなんだ。空間論的にいって愛の本質はなんなのかといったら、愛とは他者と共に生きる力である。考え方が違い、価値観が違い、性格が違い、立場が違い、感じ方が違う。そういう人とですね、共に生きる力が空間論的な意味で愛の力だ。それを短い言葉で言ったら、空間論的な愛の本質とは、愛とは他者と共に生きる力である。他者と共に生きるためには、相手から学んで自分を成長させるか、相手の世界に飛び込んで自分の人間性の幅をつくるか。どちらかの成長の仕方を自分がしなければならない。それが愛だ。**

**だから、ほとんどの人が、この相手が自分と同じような感じ方をしてくれ、相手が自分と同じような考え方をしてくれることを望んでる愛なんですよね。愛するよりも、愛されることを望んでしまってる。で、お互いに求める愛になってしまったら、その愛は壊れますよ。与えるものがないからね。反発しちゃいます。お互いに奪い合ってるんだ。奪い合えばなくなってしまうんだ。与え合えば増えるけどね。求める愛は幼い愛だ。愛は求める愛から与える愛へと成長していく。そして、大人になれば、求めるよりも、与えることに、愛を与えることに喜びを感じ始める。それが成長した愛だ。お互いに愛されたいと思ったら、その愛は壊れる。お互いに愛する心を持てば、その愛はどんどん成長していく。与えれば与えるほど返ってくるのが愛ですからね、愛すれば愛するほど、愛されてしまう。愛されたいという自己中心的な愛は、これはまだまだ、この親離れしていないですね、幼い自己中心的な愛の形なんですよね。だから、人間は本当に独立した一個の存在になればですね、そういうこの愛されたいという自己中心的な愛から、愛する喜びに変わっていく。だけど、人間は不完全だから、一生愛されたいという気持ちは残ってるんだけど、だんだん大人になっていくにしたがって、求めるよりも、与えてあげて相手が幸せな顔をしてくれたら自分もうれしいというね、そういう気分にだんだん変わっていく。それが大人の愛だ。**

**お父さん、お母さんというのは、子どものために尽くし切って、まったく見返りを求めないというね、そういう愛にまで人間は到達できる。与え尽くす愛もある。だけど、やっぱり、愛されたいという気持ちはみんな残ってる。どちらが強いかによってね、その本当の愛かどうかが分かれるわけですね。愛は基本的に他者中心的な心遣いなんだ。だから、求める愛よりも、与える愛のほうが多くなってこなければ、愛の本質に近づいていけない。ちょっとは愛されたいという気持ちはみんな残ってるんですけど、だけど、どちらのほうが大きいかによってね、その愛の価値は決まるわけですよね。相手に愛を与えて、相手がにこっとしてくれたら、めっちゃうれしいというね、もうそういうこの愛になっていくか。相手が何か自分にしてくれる、相手が自分に尽くしてくれる度合いに応じてしか、相手の愛を感じない、相手を愛せない。これは自己中心的な愛で、この愛の本質を見失った愛ですよね。これは相手を不幸にしますよ。相手から奪えるだけ奪って、自分は何も与えないという愛ですからね。これは相手を不幸にしますよ。とにかく空間論的な愛の本質は、愛するとは他者と共に生きる力である。そのことをですね、まず押さえなければならない。だから、愛の能力を成長させようと思ったならば、他者と共に生きる力を成長させるという、そういう努力をですね、する必要がある。**

**もう１つ、今度は時間論的な愛の本質。時間論的な観点から愛の本質を見極めようと思ったらどうするか。時間論的っちゅうことはどういうことなのかといったら、愛の一番の根っこはどこにあるかっちゅったら、それはセックスだ。生殖という活動である。すなわち、雄と雌が互いにこの命を交わして子孫を残そうとする。この種族保存の欲求というところからですね、愛は生まれてくるのである。だけど、この種族保存の欲求というものから直接的に出てくるものは恋だ。恋というものは、最終的にはセックスという、生殖という活動を含む。だけども、愛というものはですね、そういうこの肉体的な生殖という活動を超えた精神的に純化された世界である。なぜかといえば、恋は子孫を残すということのために存在するもんだけど、愛というのはですね、ただ男女の愛だけじゃなくって、親子の愛もあり、この国家を愛するという愛もあり、職業を愛するという愛もあり、また、ペットを愛するという愛もある。愛は精神的に純化された世界だ。そういう流れからですね、愛の本質を見極めようと思ったらどうするかといったら、この種族保存の欲求から直接的に出てくる恋と、精神的に純化された愛とはどう違うのか。そこのところをですね、この見極めていくということがですね、愛というものを時間論的な観点から、この考えてみるということになるわけですね。**

**じゃあ、恋と愛とはどう違うのか。恋というのは、これは離れておる男女を結び合わせることによって、子孫を残させようという目的を持った心情。これが恋なんですね。その恋がどんなに純粋で、どんなに美しくって、どんなに素晴らしい恋でも、恋は最終的にはこの性交渉に至る。すなわち子孫を残すという、そういう目的に到達させるためのですね、心情であります。だから、恋をするとどうなるかって、恋をすると必ず相手を理想化し始めるんですよね。恋をすると、相手を理想化し始める。そして、やがて、そのあばたがえくぼに見えてきちゃったりなんかしてね、あばたすらえくぼに見えて、あばたもえくぼという状態になってきて、さらにもっと好きになっていってしまうと、この恋は盲目っちゅってですね、相手の本当の姿が完全に見えなくなってしまう。その相手の姿が本当に完全に見えなくなるころ、だいたい結婚しようかなと思ってしまうんですよね。**

**で、恋というのは、結婚させるために出てくる心情なんですよ。結婚させようと思ったら、あばたがえくぼになって、恋は盲目という状態にならないと、結婚させられない。なぜかといったら、なぜ恋をすると、この恋は盲目という状態になってしまうのか。それは、相手の本当の姿がちゃんと見えておったら、絶対、結婚したいと思いませんのでね。結婚させなきゃなりませんから、相手の本当の姿がだんだん、だんだん、見えなくなってきて、自分の意識の中でつくり上げた相手の理想像を通して相手を見るというですね、そういう状態になってしまう。だから、恋をすると、もうこんなかっこいい人はおらんとこう思ってしまうんですよね。で、自分の中でつくり上げた相手の理想像を通して、色眼鏡で相手を見てるようなもんですから、相手の現実はどうであれ、とにかくもういつも素晴らしく見えてしまう。それが恋の働きなんですね。とにかく相手の本当の姿が見えておったら、結婚したいという気持ちは生じてきませんので、相手の本当の姿を見えなくさせてしまうのが恋なんだ。だけど、結婚するとどうなるか。結婚すると、一つ屋根の下で生活するわけですので、離れていませんからね。結婚して一つ屋根の生活をし始めると、離れていませんから、恋しい、恋しいっていう心情はだんだんしぼんでくるわけ。恋しいというのは、離れていて生じてくる心情ですから、結婚してしまうと、恋しい、恋しいっていう心情がだんだんしぼんでくる。恋しい、恋しいっちゅう心情がしぼんでくると、相手を理想化する心情もしぼんでくる。で、相手を理想化する心情がしぼんでくると、日を追うごとにだんだん、だんだん、この相手の短所、欠点が目に付いてくる。で、なんでこんなやつと結婚しちゃったんだろうと思って、反省しちゃったりなんかしてね。で、やがて、あばたがあばたに見え、えくぼはえくぼに見えて、正気に返ってしまう。そこから実は愛が始まるんだ。いや、結婚というのは人生の墓場ではない。結婚は恋の墓場であって、愛の始まりなんだ。これがね、学問的に恋と愛との違いというものを峻別する原理なんだ。**

**だけど、それは学問であってね、現実はね、そんなここまでは恋で、ここからが愛だ。そんな分かれ方はしてない。現実的にはね、恋の中にも愛があり、愛の中にも恋がある。それが現実なんだ。だけども、だから恋愛というんですけどね。だから恋愛というんですけども、恋愛といってしまっとったらですね、恋と愛との区別がはっきりせえへんもんですから、結果として、その恋の終わりが愛の終わりになっちゃったりなんかしてね、もう恋しい、恋しいという心情がなくなってしまったら、もう俺たちの愛もおしまいだねなんてなことを言ってしまったりなんかしちゃったりなんかして、で、成田離婚になっちゃたりなんかしてね。もう新婚旅行に行く前に、もうこれは持たんなと思って、もう別れようかっちゅうことになってしまったりする。それは恋の終わりなんだ。だから、そっから恋が終わったところから、実は愛が始まるんだ。ということは、恋というのはね、相手の本当の姿が見えなくなってしまって、で、その恋は盲目となってしまってですね、で、もうその自分が好きになってしまうと、みんな『完全無欠のロックンローラー』になってくるわけですよ。もうこんなすごい人はおらんと思って。**

**だけど、人間を愛するということは、『完全無欠のロックンローラー』を愛するようなもんやない。人間を愛するということは、みんな不完全な存在を愛することなんだ。人間皆、不完全。不完全っちゅうことはなんなのかといったら、人間はどんな人間でも、長所半分、短所半分。どんな立派な人間でもね、必ず他人から好かれるところ半分、他人から嫌われるところ半分。皆、半分ずつ持っておる。それが人間なんだ。人間性というのは、長所半分、短所半分という構造で成り立ってるんだ。どんな立派な人間でも、長く付き合ったら、必ず嫌やなと思うところが半分は出てきてしまう。これはもう避け難い宿命なんだ。人間性というのは、必ず長所半分、短所半分。人間を愛するということは、自分が嫌だなと思うところを半分も持ってる人を愛すること。それが人間を愛するっちゅうことの真実、現実、本当の姿だ。人間、どんな人間でも、長所、短所、半分ずつ。長所は他人から好かれるところ、短所っちゅうのは、他人から嫌われ、嫌がられ、他人から非難され、軽蔑されるところが半分ある。みんなそうなんだ。相手の中にも自分の嫌なところがある。相手から見たら、必ず自分の中にも嫌だなと思うところは、半分はあるはずなんだ。ない人間はいない。なぜ人間は長所半分、短所半分なのか。それは人間も宇宙の中に存在する。人間は宇宙の摂理の外には出られないんだ。人間、寝とっても生きとる。寝とっても生きとるっちゅうことは、生きてるっちゅうことは、自分で生きとるんやない。生きとるっちゅうことは、宇宙の摂理の力によって生かされてるんだ。人間の命は宇宙の摂理に支配されておる。人間は宇宙人で、宇宙の外に出られないんだ。だから、宇宙の摂理の支配のもとにある。**

**じゃあ、宇宙の摂理とはなんなのか。宇宙の摂理というのは、マイナスに評価されるエネルギーとプラスに評価されるエネルギーとが、エネルギーバランスを模索しながら、宇宙の秩序をつくってる。それが摂理だ。その力によって、宇宙は万物をクリエイトするんだ。だから、万物の基本的なあり方は、調和作用、平衡作用、バランス作用、これがあらゆるものの存在の働き、存在の仕方なんだ。また宇宙というのは、常に一対という、対という構造を成しておる。光には影がある、表には裏がある、善には悪、美には醜、真には偽、清には濁、上には下、右には左、前には後ろね。全部一対なんだ。どっちが多いっちゅうことはない。半分半分なんだ、全部が。だから、人間性というものもね、長所、短所があれば、半分ずつなんですよ。だから、人間を愛するということは、長所半分、短所半分。自分の好きなところも半分あるけど、自分の嫌いなところも半分ある。そういう存在を愛するっちゅうことが、人間を愛するっちゅうことの真実なんだ。だから、自分の嫌いなところが半分あることが嫌やっちゅう人は、もう人間を愛する資格のない人間や。長所しか愛せんっちゅう人は、神様しか愛せない。人間っちゅうのは、どんな人間でも、長所、短所、半分ずつなんだ。人間を愛するっちゅうことは、長所、短所、丸抱えで愛することなんだ。長所を愛せても、短所は愛せんっちゅう人は、人間を愛する資格がない。そういう人間である。**

**だけど、今、残念ながら、学校教育の影響でですね、長所はいいけど、短所はいかんという学校教育の影響で、みんな長所は愛せても、短所は愛せないという人間ばっかりや。短所があったら責める。そんなことをやっておったら、人間みんな短所を持ってるんですから、不完全な人間同士が責め合えば、この世は地獄や。責め合えば地獄。だけども、今、本当にみんな地獄なんだ。離婚してなくっても、誰も幸せではない。離婚してなくっても、みんな夫婦は悩んでる。苦しんでる、耐えてる、我慢してる、誰も幸せではない。それはみんな理性の奴隷になってしまってるからだ。みんな完全性を求めるから、みんな不幸なんだ。本当に人間が幸せな人生を生きていこうと思ったら、人間はどんな人間でも、長所、短所、半分ずつあるんだ。相手から見たら、自分の中にも必ず嫌だなと思うところが半分はあるはずなんだ。だのに、相手は文句を言わんと、我慢してやってくれてる。なんとうれしい、なんと幸せや、なんとありがたいことやと思って感謝せんないかん。自分が見たら、相手の中に嫌なところがあるから、それを直してと言うけども、相手から見たら、こっちの中にも半分も嫌なところがあるはずなんや。それをなんも言わんと耐えてくれてる。なんてすごいことやと思わないかん。**

**とにかく人間を愛するっちゅうことは、長所、短所、丸抱えで愛することで、長所は愛せても、短所は愛せないという人は、人間を愛してないんだ。長所を愛してるんだ。人間を愛するっちゅうことは、その人を愛するっちゅうことは、長所も短所も丸抱えで引き受けることなんだ。それが人間を愛するっちゅうことの意味だ。だけど、短所はそやけど、愛せんやろうと思うんですよね。それを愛せるんだ。どういうことなのかと。人間の本質は心や。理性やない、心や。人間らしい心とは謙虚な心や。謙虚な心をつくってくれるのは長所やない、短所やと。すなわち、人間の本質である心というのは、短所がつくってくれるんや。短所がなかったら人間じゃないんだ。短所をなくさせようとすることは、相手に人間ではなくなれって言ってることなんですよね。相手の短所を責めるということは、おまえは人間でない人間になれと言ってることなんだ。相手の人間を否定してることになってくる。短所がなくなったら、人間らしい謙虚な心はつくりようがない。出てこない。長所じゃ謙虚になれませんよ。傲慢になってしまう。人間らしい、人間の本質である心をつくってくれるのは短所だ。短所がなかったら、人間じゃない。だから、短所は絶対になくす努力をさせてはならない。短所をなくそうと思ってはならない。**

**だけど、短所が出てきたら嫌われるからね、だから、短所をあんまり出てこないように注意せんないかん。でも、短所はなくならないんだからね、なくならないものをなくそうとすることほどばかなことはない。無理なことはない。無駄なことはない。短所はなくならない。半分はあるんだ。短所はなくならないんだから、なくす努力はしたらいかん。だから、あんまり出てこんように注意せんないかん。そして、短所をなくす努力をすること、時間があったら、長所をとことん伸ばす努力に向けなければならない。長所をとことん伸ばす。長所を伸ばすということは、どこまで伸ばすのか。それはさすがにプロやな。さすがにプロやと言ってもらうところまで伸ばす。それが長所を伸ばす最低基準なんだ。そこまでいかんと、長所を伸ばす意味はないんだ。さすがにプロやといって一目置いてもらえる力をつくらんことにはね、人のために役立つことはできないんだ。さすがにプロと言ってもらえるぐらいの力なしにですね、人の役に立とうなんておこがましい話や。さすがにプロやと言ってもらえて、初めて人に喜んでもらえる仕事ができる。人の役に立てるんだ。何かしら、さすがやなと言ってもらうものを持たなかったら、プロやない。**

**そこまでまずは長所を伸ばすことがですね、まず職業人としては最低限度の目標だ。さすがと言ってもらえないような力で金をもらうなんてとんでもない。むしろ金を払って、勉強させてもらわないかんぐらいの話やと。さすがと言ってもらって、初めて金がもらえる。そのことをですね、プロは忘れてはならない。金をもらうんだから、プロなんですからね。さすがと言ってもらえる力がなかったら、恥ずかしいと思わんないかん。とにかくは、短所をなくすような努力をしとる時間はないんやと。長所をとことん伸ばして、さすがと言ってもらえるものを何か１つはつくらんことには、プロとしてはやっていけない。短所はなくさないで、俺にはこういう駄目なところがあるんやという謙虚な心をつくることに努めなければならない。そして、短所があるから、助けてもらえるんだからね。社長さんでも、重役でも、部長さんでも、課長さんでも、もっともっと自分の短所をさらけ出して、俺のここのところ、駄目なんや。みんな、なんとかしてくれ、助けてくれへんかっちゅって、みんなに助けてもらって、もっと楽をしてね、仕事をする力をつくっていかないかん。あんまりにも頑張り過ぎる。もっともっとね、みんな自分の短所をさらけ出して、俺はここ、駄目なんや。なんとか助けてくれへんかっちゅって、助けてもらってね、楽をして、助けてもらうっちゅうことは、相手の能力を輝かせ、相手の存在を輝かせる活人力なんだ。**

**短所がなかったら、活人力という、相手を輝かせる力を持てない。長所だけでは相手を惨めにしてしまう。助けてあげるだけじゃね、相手を惨めにする。人間関係は、助けてあげたらね、必ずその人からなんらかの点で助けてもらうものをつくらんとね、人間関係のバランスは取れませんよ。助けてあげるばっかりじゃ、相手を惨めにしますよ。助けてあげたら、その人から何かしら、助けてもらうものを見つけてね、俺はここ、駄目なんや。君のその力で俺を助けてくれへんかっちゅって、助けてもらわないとね、愛じゃないんだ。助けてあげるだけじゃね、いかにも役に立ってるように見えますけど、相手は惨めだ。相手から助けてもらって、ありがとうと言えて、初めて愛なんだ。助けてあげることも立派だけど、助けてもらうことも立派なことなんだ。助けてもらうっちゅうことは、相手を輝かせる活人力なんだ、愛だ。助けてあげることも愛だけどね、助けてもらうことも愛なんですよ。相手を輝かせる、相手を称賛する、愛なんだ。君、すごいね。僕はそこのところ、本当に駄目なんだと。君、すごいねと言って、褒めてる愛なんだ。活人力なんだ。短所がなかったら、活人力は持てないんだ。だけど、俺はこういう短所があるぜって威張っとったらいかん。短所はできるだけ出てこないように注意せんないかん。だけど、短所は助けてもらうことによって、相手を輝かせるという、愛をもって短所を使わなければならない。**

**そうすれば、短所は愛されます。短所をさらけ出せば、人間味が出てくる。可愛いやつになってくる。もっともっとね、無理せんとね、助けてもらってね、楽して生きる力をつくっていく。それが人間らしく生きるっちゅうことなの。その代わり、何か１つはね、さすがやなって言ってくれる、そういうものを自分の中に早くつくらんと恥ずかしい。長所を伸ばさんことが一番恥ずかしいことだ。短所があることは恥ずかしくない。短所があれば助けてもらえばいいんだ。恥ずかしがる必要はない。今まで短所を恥ずかしがってね、長所を伸ばす力をね、つくることを忘れておった。短所はいかんことばっかり考えて、短所をあんまり気にしたら病気になりますよ。自分が惨めになりますよ。行動力は出てきませんよ。短所を気にしたら、行動力は出てきませんよ。短所を気にしたら、人間関係が駄目になりますよ。人間関係づくりが下手になりますよ。短所はあって当たり前なんや。さらけ出したら、人間関係、楽ですよ。その代わり、長所をどんどん伸ばして、さすがやって言ってもらえるところまで、自分が好きなところ、長所を伸ばしてね、天分を磨いて、好きなところ、得意なところで頑張るんだから、楽しいですよ。そこでさすがという力をつくって、人の役に立つんだ。短所はさらけ出して、かわいいやつやと言うてもろうて、助けてもらって、ありがとう、ありがとうっちゅっとったら、人間関係はうまくいってしまう。というか、もう自分が楽なの、助けてもらうから。もっともっと助けてもらう上手にならんないかん。話し上手は聞き上手というようにね、長所で相手の役に立つのも大事だけど、助けてもらう力もつくらんないかん。それがこれからの個性の時代の組織のね、あり方なんですよ。**

**そういうふうにしたら、短所はだんだんね、愛せることになってきます。短所を愛するとはどういうことなのかといったら、まず短所がなくなったら人間じゃないんだ。短所があってこそ人間なんだ。だから、まず短所をなくさせようとするような意識を持ったらいかん。短所の存在を認めて許さなければならない。そこから愛は始まるんだ。そこから人間の愛は始まるんだ。すなわち、愛するとは、愛するって、許すことなのね、ね。そっから愛が始まるんだ。人間への愛は許す愛から始まるんだ。短所を許し合わなければ、愛は育たない。結婚する前にね、お互いに嫌なところは半分ずつあるんだから、責め合わないでおきましょうね。そこはなくならないんだから、許し合って生きていきましょうね。そのことを約束事にして結婚しなければ、必ずその愛は破綻しますよ。例え破綻しなくっても、あとは我慢する愛になってしまいますよ。つらい、苦しい、悩み多い愛になってしまいますよ。結婚する前に約束しなきゃいかん。お互いに短所は半分ずつある。嫌なところは半分ずつある。それは許し合って生きていかないとやっていけません。だから、お互いに半分ずつ嫌なところがあるんだから、そこはなくならないんだから、許し合って生きていきましょうね。**

**そして、短所を許すだけでは愛ではない。それは半分なんだ。人間を愛するということは、長所、短所、丸抱えだ。短所を許し合って、その次にいいところ、素晴らしいところ、長所を見つけ出し合って、長所を褒め合って、長所を伸ばし合って、お互いに役に立ち合うという、そういう関係性をつくっていく。それも愛だ。短所を許し合って、長所を伸ばし合う、それが人間的な愛の姿だ。そうして初めて、夫婦は年を重ねるごとに、愛は積み重なっていって、愛は熟成していって、そして、素晴らしい愛の花を咲かせる。それはひょっとしたら、死ぬときにはね、今度、生まれてきても、また一緒になろうね、なんちゅうようなことを言ってね、死んでいくようなことになるかもしれない。せっかくね、その何年か共に生活して関わっていくんだ。愛がだんだんと成長することがなかったら、悲しいじゃないか。だけど、今の夫婦はね、年を経るごとにね、だんだん、だんだん、愛がなくなっていってね、最終的には愛とは空気みたいなもんになってしまうんだ。夫婦の最高の形は空気みたいなもんやと。空気っちゅうのは、あっても、あるかないかわからん。おっても、そのありがたみがわからんというのは、そういう夫婦になってどうするんやと。年を重ねるんだから、ますますね、ありがたみがわかって、感謝し合える。そこで初めて年を重ねた価値がある。**

**とにかくは、時間論的な観点から言うならば、愛の本質は、愛するとは、短所を許し合い、長所と関わる力である。そういうふうに言わなければならない。だから、愛の力を成長させようと思ったら、短所を許す力を成長させなければならないし、短所を発見する力を成長させなきゃならんし、長所を褒める力を成長させなきゃならんし、長所を発見する力を成長させ、長所を褒める力を成長させ、長所を伸ばし合うという力を成長させる。それが愛だ。時間の観点から言うならば、愛の本質は、短所を許し合い、長所と関わる力である。それが愛なんだ。今日は、その愛の本質とはなんなのかというね、その話をさせてもらいました。で、次回からは、その愛をどういうふうな方法で育てていけば、組織は素晴らしいものになるのか。家庭は素晴らしいものになるのか。どうしたら自分が幸せになるのか。その話を次回からはしていきたいと思います。どうもありがとうございました。**